

# 『空中ブランコ乗りのエリー』

(2020 年改訂版)

人生をショーに喩えるならば、照明を浴びるのは何者だろうか。  
自己存在を問うことが人間の証明であるとしても  
照らし出された真実は、悲劇へのチケットだった。

## 01.はじめに

このシナリオはクトゥルフ神話 TRPG 基本ルールブックに対応したシナリオである。

マレウス・モンストロルムのクリーチャーを使用している。

**舞台** 現代日本  
(に設定してあるが、何処でもいい)

**プレイ時間** 4～5 時間程度  
(ボイスセッション)

**推奨人数** 1～3 人程度

**推奨技能**

<目星> <図書館> <英語> <ドイツ語>

**準推奨**

<医学> <人類学>

交渉技能 (<言いくるめ>はおすすめしない)

**難易度** 低

**ロストの可能性** 低

**発狂の可能性** 低

後味の悪いおとぎ話のような雰囲気 of シナリオ。  
戦闘は想定していないが、戦闘できなくもない。  
ただしおすすめはしていない。

また、当シナリオの推奨・準推奨は必須技能ではない。  
工夫次第で情報は入手できるだろう。

## 02. 事件の真相

白鳥サーカス団は、団長バートランド・ブラウンによる身寄りのない者や社会から追い出された厄介者とされた人達で構成されている。このサーカスが世界的に有名になったのは、エリーが空中ブランコの大技、三回宙返りを成功させてからである。

金色の髪、青い瞳、月を思わせる白い肌を持つ天使のようなエリーは、ニョグタの落とし子である。

この闇の冒険的な子供は、人間、食屍鬼、そしてニョグタとの交配によって生まれたとされる。思春期になると、エリーのようにニョグタの意思を汲み取るようになる。ニョグタから送られてくる悪夢によって、クトゥルフ神話の世界を知り、毎晩正気度を失っていく。彼らは 30 歳～60 歳の間に突然変化を起こし、親であるニョグタと同じ怪物の姿となってしまう。

本来であればエリーは落とし子としての影響をまだ受けない時期であるが、老婆に化けたニャラトホテプに与えられた薬を飲んで、怪物になってしまうまでのタイムリミットが大幅に短くなってしまっている。遅くともサーカスの公演後には怪物になってしまう。

探索者はエリーの正体をエリー自身に伝えねばならない。探索者はエリーにどのような最期を迎えさせることができるだろうか。それとも、その最期を先延ばしにし、彼女の人生を狂わせ

るのだろうか。

### 03. 登場するクリーチャー・NPC

今回、キャラクターに敢えて固定の名前を付けたが、何度か回している KP はこの名前の通りにしなくても良い。好きに名前を変えてもらって構わない。

■エリー 鳥籠に囚われた空中ブランコ乗り  
STR 18 CON 14 SIZ 15 INT 15 APP 17  
POW 18 DEX 14 db+1D6

[技能]

<空中ブランコ (三回宙返り)> 80%

<ドイツ語> 70% <日本語> 50%

<スペイン語> 40% <英語> 50%

その他、KP の望む技能

[呪文]

<神格との接触/ニョグタ>

これは無意識にニョグタの夢から教わった呪文であり、彼女が接触を望めばニョグタは彼女を自分のいる場所へ招き入れる。

空中ブランコ乗りの少女。18 歳。金色の髪、青い瞳、色白の西洋人っぽい顔立ちをしている。<人類学>に成功すれば、彼女がゲルマン人の特徴を持っていることが分かるかもしれない。確かに、彼女はドイツで拾われた子供である。

彼女はニョグタの落とし子であるが、彼女自身はそのことに気付いていない。

本番が近いのに、技を完成させられていないことに焦りと不安を感じている。四回宙返りを成功させるのに執着しているのは、プライドやアイデンティティを守る為である。彼女は白鳥サーカス団の空中ブランコ乗りとして、自身を見ている。

STR18、SIZ15 と体格はいいが、雰囲気や愛らしい顔、しなやかな体の使い方などによって筋肉質なのはあまり気にならない。現実世界においてもチアリーダーは可愛いイメージがあるが、よく見るとマッチョでビックリしたことが作者はあるが、そんな感じである。

好きな食べ物は抹茶のお菓子。日本文化も大好きで、アニメや漫画、可愛い物が大好き。(彼女の好みは変更していい)

KP は、健気で探索者に好かれるようなキャラクターとして演じるといい。

「私は一体、何者なの……？」

「私、空中ブランコ乗りのエリーでいたい！」

■エリー

闇の冒険的な子供/ニョグタの落とし子

STR 29 CON 20 SIZ 20 INT 15 POW 18  
DEX 14 耐久力 20 db +2D6

[攻撃]

かぎ爪 65% ダメージ 1D6+db

噛みつき 65% ダメージ 1D8+db

組み付き 50% 以下参照

STR 対抗の後、無数の巻きひげが犠牲者の開口部へ押し入り SANC(0/1D6)

逃れられない限り毎ラウンド CON 対抗と、1D8 のダメージを受ける。

窒息死するまでこの組み付きは続くが、彼女の精神が怪物の精神に勝てば解放される可能性がある。

[装甲]

貫通可能な武器のダメージ無効、ほか全ての攻撃ダメージの最小値しか受けない

火・酸・電気・放射線によるダメージ無効

黒く膨れた不定形の体は、なんとか人間らし

い姿を保っているが、人間というにはあまりにも怪物めいた姿をしている。もはや、エリーの原型は留めていない。狼のように鋭い牙、鋭い爪、飛び出した赤い眼玉は彼女の体に本来流れているべきはずだった血液の色である。

怪物のターンになった時、まず KP はシークレットダイスでエリーが探索者を認識して攻撃を止め、逃走するかどうか彼女の POW×3 (54%) で判定する。成功したら逃走を再び試みる。失敗なら攻撃をする。

彼女に対して<説得>などの交渉技能や<精神分析>で向き合うというのなら、成功すればその想いを彼女は理解し自我を保てるだろう。しかし、それは探索者からの逃走を試みるということになる。

この怪物の姿を目撃した場合 SANC(1/1D10)

## ■老婆

エリーに選択肢を与える者  
人間の姿のニャルラトホテブ

みすばらしいローブを被った、占い師にも似た老婆。エリー曰く、どの国での公演にも現れる不思議なお婆さん。そんな彼女の正体は、ニャルラトホテブである。

ニャルラトホテブはエリーの怪物になるまでの時間を短くし、サーカスやそこに集まった人々を混乱に陥れようとしている。

老婆を倒すことや、その正体をこのシナリオ内で知ることはいできない。

## ■バートランド・ケージ

エリーに恋した男

白鳥サーカスをまとめあげる団長

STR 13 CON 13 SIZ 16 INT 14 POW 12  
APP 11 DEX 9 耐久力 14 db +1D4

[主な技能]

<信用> 55% <心理学> 60%

<芸術：アコーディオン> 70% <日本語> 40%

[攻撃]

<杖> 60% 1D6+db

アメリカ人、39 歳。元々白鳥サーカスのブラスバンドを担当していたが、団長になった。元団長に拾われた捨て子で、自分と同じ境遇の者をサーカスの仲間に加え家族として扱っている。

彼はエリーに魅入られた最初の人物で、エリーの血の秘密と彼女の正体に気付いてしまったがその事実を拒否し、受け入れる気がない。彼女に大変執着している。彼はエリーが天使であり、怪物になどなるわけがないと思込んでいる。もはや、妄信している。

彼がエリーに対して抱いている思いは、家族以上の物である。娘でもあり、初恋の人物でもある。

説得しようとしても、そもそも話を聞こうとしない。

「エリーは私の天使だ……！」

「お前達に何がわかる！私のエリーを怪物呼ばわりするとは、出ていけこの悪魔どもめ！」

## ■イジャスラフ・イワノフ・スヴァトスラフ

パトロン/芸術を愛する投資家

STR 12 CON 9 SIZ 14 INT 16 POW 8  
APP 13 DEX 8 耐久力 13

[主な技能]

<信用> 55% <経理> 70% <説得> 60% <日本語> 60%

ロシア人大富豪の息子、27 歳。幼い頃から芸術が好きで、特に演劇などの動いている物を見るのが楽しいという。白鳥サーカスのパトロン

となったのは1年前で、時たま彼らと一緒に世界を飛び回っている。今回も、初の日本公演に同行している。

彼は恵まれた生活をしているが、探索者に大変近い感性を持っていることだろう。また、エリーが何者であるのか非常に気になっている一人である。故に、この事件の依頼人として登場する。

彼は団長の異常さについて気が付いている人物の一人であり、探索者に時々アドバイスをするだろう。

「これは失礼。私はこのサーカスの一ファンにして、パトロンのイジャスラブさ」

「団員達には君たちのこと、エリーのメンタルケアを頼んだと伝えておくよ」

■マーシー・フォーサイス 綱渡りの娘  
矜持の高いエリーの理解者  
STR 15 CON 18 SIZ 14 INT 12 POW 15  
APP 15 DEX 17

[主な技能]

<綱渡り> 82% <日本語> 55% <皮肉> 50%  
<キック> 50%

イギリス人、20歳。エリーが入団した5年後くらいにサーカスに入った。彼女は両親と絶縁し、家出し行く先に困っていた時にサーカス団と出会う。元々バランス感覚が優れていたこと、そして持前の度胸と根性で綱渡りの技を覚えた。団長には大変世話になったのと、彼に褒められることが好き。彼女はエリーと一番近い立場にある。

彼女は命をかけた技を披露することに誇りを持っており、同じく命をかけた技を成し遂げる者を尊敬している。命をかけないピエロは、恥

知らずのマヌケだと思っている。

そんなシビアな彼女だが、実際のところツンデレである。エリーのことを同業者としてだけではなく、家族として（妹として）心配する面も。ピエロとは私生活でもあまり仲は良くないようで、いつも喧嘩ばかりしている。

エリー以前の空中ブランコ乗りとは、あまり会話をしたことがない。

「エリーは人気落ちることを堪えられない」

「私たちは命を懸けるパフォーマー。玉乗りしてるピエロなんかとは格が違うのよ」

■ジャン・クゥヴェール 猛獣使いのおじさん  
自分の身を案ずる者

STR 13 CON 15 SIZ 16 INT 11 POW 14  
APP 8 DEX 10

[主な技能]

<猛獣に命令する> 75% <回避> 50%  
<応急手当> 50% <鞭> 60%

イタリア人、40代のおじさん。陽気で、いつも鼻歌を歌いながらライオンと戯れている。時々噛まれている。甘噛みだから安心し給え。人の顔と名前を覚えるのが苦手で、ライオンの名前ですら毎回呼び間違えている。

白鳥サーカスには団長バートランドと同じくらいの時期に入団した。団長の兄のような存在であるつもりだが、忘れっぽい性格故にあまり頼られることはない。

エリーに空中ブランコを教えた空中ブランコ乗りとは長い付き合いだった。昔はその人のことが好きだった。自身が空中ブランコ乗りに恋をしたように、団長のそれも恋心に近いものであると唯一見抜いている。しかし、それ以上に執着していることは確かであると感じている。

## 空中ブランコ乗りのエリー

実際、エリーは自分から見ても眩しくて、このサーカスの誰もがエリーのことを好きだろうと思っ

「はっはっは、じゃれるなじゃれるな、イテテ」  
「団長はきっと、エリーに恋をしているんだねえ」

■ペトル・ペトラージュ 変われざる者  
エリーに問いかけるピエロ  
STR 15 CON 16 SIZ 12 INT 15 POW 10  
APP 12 DEX 16

[主な技能]

<ジャグリング> 75% <玉乗り> 70%  
<日本語> 60% <言いくるめ> 10%

チェコ人、21歳。ショーの最中は喋らないが、練習中やオフは普通に喋る。むしろ、お喋り好きな男。少しチャライ雰囲気だが、根は優しい。

唯一、エリーの血の色を不審がり、怪しんでいる。そのことを調べる為に一度、団長が近づくなと言っていた物置として使われているトラックの本棚を漁っていたのがバレて、物凄い剣幕で怒られたことがある。それ以来、エリーのこと

に触れられずにいる。  
彼は新参者で、二年前に入団したばかりであり立場は大変低い。追い出されても、金もなければ行く宛もないので団長には逆らえずにいる。

エリーのことを大変気にかけており、彼女に命をかける必要はないと話をしたことがある。しかし、それこそが彼女を空中ブランコ乗りとしての自己を確立させる言葉となってしまったことに、本人は気付いていない。

「人気なんて落ちたって死なないだろ？ ブラ

ンコから落ちたら死ぬんだぜ」

「エリーの秘密なんて何も知らな……アッ！」

■キルスティン・ウッド エリーの後継者  
落ちこぼれの空中ブランコ乗り  
STR 14 CON 15 SIZ 11 INT 10 POW 14  
APP 13 DEX 18 db +1D4

[主な技能]

<空中ブランコ（二回宙返り）> 50%  
<手品> 80% <日本語> 35% <隠す> 70%

アメリカ人、16歳。手品師としてサーカスに入団したが、空中ブランコ乗り見習いとして修業中。エリーと共に練習をしているが、彼女の域には遠く及ばない。愛称はキキ。エリーに憧れ、入団。ピエロよりも新参で、入団して1年も経っていない。星屑サーカス団のやり方を許せず、しかし自分では役に立てずエリーに任せることしかできないことを歯痒く感じている。  
空中ブランコの大技は二回宙返りしかできないが、ブランコをしながら手品をすることで人気を得始めている。

エリーの血のことは知らず、団長が何か隠しているということも全く気付いていない。

また、彼女はオカルトや占いといったことが好きで、とある占い師についての情報を知っている。

■石須 真里亜（イシス・マリア） 旧き神  
謎の美人占い師  
STR 31 CON 50 SIZ 10 INT 20 POW 38  
DEX 20 APP 25 db +2D6

[主な技能]

<こぶし> 70%  
<心を和らげる接触> 70%（触れられると闘志が



2D20 ラウンド失われ、平静を取り戻す)  
<値切り> 100% <神秘的に振る舞う> 100%  
<全てのダンス> 99%  
[装甲]  
なし 1MP 費やすごとに 1D10 耐久力再生

キルスティンが会いたいと願っている占い師。長いストレートの黒髪に、雫型の飾りのついたヘッドティカを身に着け、ベリーダンス衣装のようなアラビア風の輝くセクシーな格好をしている。胸元には銀製の大きなおはじき玉ほどの小さな三つの球のついたネックレス、指には紫色の石のついた指輪をつけている。<クトゥルフ神話>成功で、彼女の身に着けている物がアーティファクトばかりであると気づく。ネックレスについた三つの球は「空想の銀球」（『ラヴクラフトの幻夢境』P.150 参照）、指輪は「エイボンの指輪」（『キーパーコンパニオン』P.50 参照）である。スカラベやホルスの眼のアミュレットも身に着けている。

イスラム系美女。20代の女性に見えるが、瞳は成熟した年月を感じさせる。エジプト人を自称する。名前は本名ではないという。

探索者にとっても友好的で、占いによって探索者を導こうとする。老婆と間違えられると胸を押し当てて、「こんな綺麗なお姉さんがおばあさんなわけないでしょう？」と少し怒る。

彼女はエリーのタイムリミットを元に戻す薬を持っているが、それを使うことをすすめない。先延ばしにしたところで、いつかは別れは来るものであり、共に過ごした時間の分だけ別れの痛みは大きくなると忠告する。そして、一度捻じ曲げられた彼女の時間を再び捻じ曲げるには責任が伴う。その責任を探索者は取れるのか、と問うだろう。

## 04. 探索者、ハンドアウトについて

シナリオ本編は、怪しい小瓶を老婆から貰ったエリーを見つけ、倒れたエリーのもとに駆け寄り状況を把握するところから始まる。故に、彼女に元々興味を持っている探索者でなければ物語が進行しにくい。探索者は如何なる時でも積極的に事件に関わってもらいたいものだが、なかなか上手くはいかないこともあるだろう。よって、参加する探索者に一番当てはまる立場を選び、以下のような情報を先に提示しておくといいかもしれない。これは必須のハンドアウトではないので、使わなくても構わない。

また、倫理観・価値観を問うシナリオ内容の為、PLと探索者の考えが一致している方がいいだろう。

### ハンドアウト例

#### ★エリーのファン・エリーに興味がある・サーカスが好き

あなたは「白鳥（はくちょう）サーカス」に所属する空中ブランコ乗りのエリーを何度か見ている。それはテレビでかもしれないし、実際に海外に公演を見に行っても構わない。

そして、白鳥サーカス初の日本公演が決定し、あなたは意気揚々とチケットを買おうとしたが、残念なことにチケットを入手できなかった。

せめて応援の手紙が花束だけでも渡せたら、あるいはグッズを買ったり外観だけでも写真に撮ろうと、あなたは会場へ向かうことにした。あわよくばエリーに遭遇して、サインを貰えたら……などと期待しながら。

⇒ このハンドアウトが従来のものであり、積極的にエリーに関わり彼女に寄り添う存在となってくれるはずだ。このハンドアウトの探索者のみ、導入前のプロローグにあるイベントが発生する。（他ハンドアウトでも、無理のない人物であればイベントを発生させてよい）

**★エリーの所属する白鳥サーカス団に恩を売って利益を得たい（ビジネス関係）**

初の日本公演でチケット即完売。白鳥（はくちょう）サーカス団はお金になったと思ったあなたは、早速サーカスについて調べた。すると、海外のサーカス好きの大富豪がパトロンとしてしていることが分かり、その人物と繋がることで出来れば更なる利益が得られるはずだと考える。

あなたは幸運なことにパトロンのイジャスラフ・イワノフと話をする機会を得た。会場に呼ばれたあなたは「エリーを紹介したいんだけど、おかしいな、何処へ行ってしまったんだろう。貴方も探していただけませんか？」と彼に言われ、エリーを探すことに。

**★ジャーナリスト**

あなたは日本初公演を行う白鳥（はくちょう）サーカス団に注目し、空中ブランコ乗りのエリー

ーに取材をしようとしている。多くの報道陣との競争に勝ち、あなたはエリーに取材を取り付けることができた。

会場で待ち合わせをしていたが、時間になってもエリーが来ない。

あなたはエリーを探すことにした。

**★会場の設営の関係者、会場の警備員として呼ばれた**

サーカスの内部のことまでは分からないが、あなたは何らかの形で白鳥（はくちょう）サーカス団の公演に関わっている。あなたは仕事が終わって帰ろうとするが、空中ブランコ乗りのエリーがコソコソと一人で何処かへ向かうのを目撃した。

何度か彼女を見ていたあなたは、挙動不審な彼女に違和感を覚え、あとをつけることにした。

**★サーカスに入団したい**

あなたはサーカスに入団して自分の持つ技を世界に披露したい、有名になりたいという夢がある。あなたはそんな夢を叶える為に、駄目元で白鳥（はくちょう）サーカス団に突撃し、芸を認めさせて入団させてもらおうと意気込みながら会場へ向かう。

## 05. プロローグ

貴方は、自分とは何か、考えたことがあるでしょうか。  
誰かに、「自分はどんな人でしょう」と聞いてみてください。  
きっと、自分が思い描いていた自分とは異なる自分が、答えとして返ってくるはずです。  
貴方は何者なのでしょう。  
そして、彼女は――

---

探索者の住む街は、どんな所だろう。季節ごとにドレスアップする山があるのか、毎日気紛れに歌う海があるのか、はたまた同じ動きを繰り返す機械仕掛けの都市なのか。その描写はKPに任せる。そして、その街が今桜の舞い散る春なのか、照りつける太陽の眩しさに汗が垂れる夏なのか、落ち葉を踏み鳴らす秋なのか、白い天使の羽のような雪が降り積もる冬なのかも自由に決めていい。どんな街でも、どんな季節でも構わない。しかし、例として今回は日本の都会に舞台を据えてみよう。

探索者の住む街に白鳥（はくちょう）サーカスがやって来た。誰もが彼らの来訪を心待ちにしていたし、誰もがこのサーカスを見たいと話題にしている。探索者もその一人である。きっとこの街の誰よりも、この日を待ち詫びていた。特に、白鳥サーカスの若き空中ブランコ乗り、エリーの技は格別で、探索者はエリーを自分の街で見ることができるとを喜ばしく思っているはずだ。

しかし、探索者はチケットを入手することができなかった。チケットは即完売してしまったのだ。

せめてサーカスの雰囲気だけで楽しもうと、探索者は公演前日だがサーカステントのある広場まで向かう。時刻は午前11時頃。そこには一際目を引く色鮮やかなサーカステントがある。

まるでこの広場だけ、絵本の世界になってしまったかのようだ。宣伝の為か、サーカスのブラスバンドが演奏会をしており、道行く人やサーカスのファンが人だかりを作っている。

本公演とは別に、当日までこの広場で宣伝を兼ねて余興を披露しているのだ。アコーディオンの音色に合わせて、ピエロが三つもの玉の上に逆立ちで乗ってお道化ている。

そんな中、人ごみを掻き分けようとしてバランスを崩したのか、探索者に誰かがぶつかってくる。その拍子に、ぶつかった人物が手に持っていた紙が辺りに舞った。

ひらり。探索者が複数人いる場合、その紙が探索者達の上に降ってくるだろう。

可憐な声の持ち主は、「ああ、すみません！ 私ったら。ごめんなさい。拾ってくださいますか？」と探索者達にお願いする。それは、探索者が一方的によく知っている、否、この街で白鳥サーカスが来るのを待ちわびていた者であればその名を知らぬ者はいないであろう有名人だった。

青と白の縞模様のリボンで、金色の髪を後ろで一つに束ね、空に浮かぶ雲を思わせる白いフリルのあしらわれた青いワンピースを身に纏い、白鳥型の飾りのついたベルトが光っている。青い瞳は海よりも、澄み渡る空の青さを映しているようだ。彼女こそ、白鳥（はくちょう）サーカス団の空中ブランコ乗り、エリーである。



エリーは、探索者と共に辺りに散らばってしまった紙を拾い集める。探索者が紙に目をやると、それは白鳥サーカス団のチラシだった。

[チラシの内容]

白鳥サーカス団 公演まで あと 1日！

エリー、遂に四回宙返りに挑戦！？

彼女の奇跡を見逃すな！

チケット *SOLD OUT*

去年、誰も成功させたことのなかった三回宙返りを見事成功させた世界最高の空中ブランコ乗り、エリーが今回人間の限界に挑む。

人か？！鳥か？！豹か？！それとも鮎か？！  
空を飛ぶ天使を、アナタは何と捉えるか。

今日・明日の本番まで当サーカス団員たちによるパフォーマンスを特別に公開。チケットを手に入れたアナタも、手に入れられなかったアナタも、サーカステント前へ！！

白鳥サーカス団 本公演 明日の夜 19:30 から

チラシに書かれている通り、今探索者の目の前にいる彼女は、誰もできなかった四回宙返りという大技を披露するのだと話題になっている。エリーはチラシを拾ってくれた探索者にお礼を言う。

「どうも有難う。あなたも、このサーカスに興味があるのかしら」

エリーは探索者に話しかけてくる。探索者の名前を聞き、自身も自己紹介をする。少し話したところで、探索者に<アイデア>を要求する。成功で、彼女が少し元気がないように感じられる。普段サーカスで光を浴びる彼女の表情に、

不安の影が濃く映し出されている。探索者がそれに気付けなくても、人だかりの中心から時々英語が混じってはいるが拙い日本語で、口上が聞こえてくる。どうやら、白鳥サーカス団の団長のようだ。

「明日の夜 19 時半からは、我が白鳥サーカス団の素晴らしいショーをご覧にいきましょう。そして空中ブランコ乗りのエリーが前代未聞の大技、四回宙返りを披露します！ 天使の飛ぶ様を、皆さんも応援しに来てください！」

すると、エリーの表情が明らかに曇る。実は彼女は、まだ四回宙返りを一度も成功させたことがないのだ。彼女はここ最近練習続きであり、大きなプレッシャーを感じている為、心も体も疲れている。疲れている様子は探索者も分かっていいが、四回宙返りができないということに関してはこの段階では探索者に打ち明けないだろう。

エリーは、探索者の持ち物や格好などに注目し、探索者の好きな物や職業に興味を持つ。または、最初からそれらに興味があったということにしている。エリーは探索者と話したり、どこかに出かけたがる。サーカスを抜け出して、一時でも不安を紛らわせたいと思っている。

KP はエリーと探索者との交流の場を作り、彼女と探索者を仲良くさせるよう心掛けてほしい。彼女が 14 時までにサーカステントに戻れば、何処に行ってもいい。探索者が自分の街を案内してくれるというのなら、エリーは喜んでチラシをピエロに押し付けて、探索者達について行く。抜け出すのは容易だ。団員に咎められることもない。

14 時までの描写は KP、そして PL で相談し、作り上げてほしい。短い時間だが、探索者とエリーの思い出となる時間だ。エリーは道行く人

達に注目されるだろう。変装の為に帽子や服を買いたがるかもしれない。あなたの街で流行りの服は何だろう。

正午になればお腹も空く。探索者おすすめの美味しい料理があれば、食べてみたいとねだろう。彼女は大変好奇心旺盛で、危険なことであっても挑戦しようとしてしまうかもしれない。

複数でプレイしている場合、ジャーナリストの探索者がいれば、ここでエリーとデートをする探索者を見つけて、記事を書こうと尾行して合流するのもいいかもしれない。

エリーと親しくなった探索者に、エリーは自分が四回宙返りをまだできずにいること、明日の公演を不安に思っていること、その不安を少しでも忘れる為に探索者を誘ったことを告げる。しかし、探索者と楽しく遊んだおかげで、初めてのことに挑戦することの楽しさを思い出したと言う。初めて空中ブランコを成功させた時、怖かったがその分楽しかった、と。きっと、探索者にもそんなことがかつてあっただろう。

14 時になると、探索者も一緒にサーカステントのある広場まで戻ってくる。お喋りをして歩いていたら、あっという間に戻って来てしまった、ということにしてほしい。

広場には既に団員達の姿はなく、人も疎らになってきていた。彼女は探索者にお礼を言って関係者以外立ち入り禁止と書かれたサーカステントの裏手へ消えていく。探索者が見送り、エリーと出会い共に過ごした幸せを噛みしめていた時だった。

探索者は胸騒ぎがする。エリーの笑顔が、黒く塗りつぶされていく。そんな光景が一瞬、探索者の頭に過る。せっかく普段通りの笑顔を取り戻した彼女に、何かが迫っている。そんな予感がしたのだ。探索者は、彼女の消えた方へ注

意を向けるだろう。

以上、プロローグは探索者をエリーに感情移入させる為の場面として使用してほしい。必要がないと KP が判断した場合、以下の導入からシナリオを進めてよい。

### 06.導入

ハンドアウトの都合や、プロローグを経ていない探索者はここから合流が可能だ。

探索者は、エリーの悲鳴のようなうめき声がエリーの消えた方から聞こえることに気付く。関係者以外立ち入り禁止と書かれた札のかかったロープの先、左に曲がったテントの裏におそらくエリーはいるはずだ。そう遠くへはまだ行っていないだろう。

大きなテントの隣には広場にもともとある堀が影を作り、探索者の行く道の光を遮っている。探索者がその影に足を踏み入れ、少し進んだところでふと、今まで全く気付かなかったが、視界の隅に黒いロープを来た老婆が存在していることに気が付く。この道に入るまで、探索者にはこのような人物は見えていなかった。その顔はロープのせいで見えないが、老婆と判別できたのは声からだった。心底愉快そうに笑う彼女は、過ぎ去ろうとする、または立ち止まって存在に驚く探索者に対して言葉を投げかける。それは走って通り過ぎようとしても、自然と耳に入ってきてしまう。

「馬鹿な娘だね、自分が何者であるかすら気づいていないんだ。知らずにまんまと騙されて、あの子は私のあげた素敵なプレゼントを飲むだろうね。だが、馬鹿なのはきっと君（達）も同じだろう。どうなるか見物だね、素晴らしいショーを頼むよ。君が観客になるのか、役者に

なるのか、はたまた演出家になるのかは自由だけどねえ」

そう言うと、不快な笑い声を残し、瞬きの間に老婆は消えている。手品にしては、あまりにも意味不明な登場と去り方である。探索者は彼女の非現実さ、彼女の不穏な言葉に嫌な予感と、エリーに何かとんでもないことが起ころうとしているのではないかと瞬時に察して不安と恐怖が募る。 SANC(0/1)

テントの裏に行くと、木箱の積まれている近くでエリーが倒れている。彼女は苦しそうに咳こみ、口の端からは黒い液体が少量零れている。彼女は暫くの間、喋れそうにない。

彼女の手には液体の入った瓶が握られていたが、コロコロと転がり探索者の足元で止まる。

#### ▼エリーの持っている瓶を見る

牛乳瓶くらいの大きさで、ねばねばとした粘性の黒い液体が少量、底に残っている。触れても問題はないが、ほんのりと甘い吐き気を催す悪臭がする。彼女の口の端から垂れている液体と同じ物のように見える。つまり、彼女は液体のほとんどを飲んだようだ。

#### <薬学>または<化学>成功情報

この液体は、探索者が見たことのある液体、ましてや薬ではない。エリーの血と比較すると、成分が同じだろうと予想することができる。

特別な設備や三時間～半日程度の時間をかけて調べるなら、それがゼラチンに大変近い物質であるということ、人間では消化できない物質であると判明する。ゼラチンに近いとは言ったが、ゼラチンそのものというわけではない。この未知なる液体に赤血球などは当然含まれておらず、闇を思わせる漆黒はタールにも近い。また、この液体を調べている時、液体が触れても

いないのに自ずと脈打ち、固まり、コーヒーゼリーのように変化するのを目撃することになるだろう。 SANC(0/1)

#### ▼黒い液体を飲む

この液体を探索者が飲んだ場合、CON×5に失敗すると嘔吐してしまう。その場合、耐久力を1D3減少させる。成功したなら腹の中で液体がたぶんたぷんと逃げ場を探すかのように動き回るような感じがし、夜になると悪夢を見てSANCが発生する。

また、口にした者は誰でも、以下のような白昼夢を見ることになる。夜に見る悪夢は、**エリーの悪夢**を参照。

---

探索者は暗い洞窟のような場所にいる。辺りははじめじめとしており、何かの気配を闇の奥に感じる。闇と同化するように現れたのは、ドロリとした粘性の醜悪なシルエットであった。それはただの液体なのだろうか、否、意思を持って動いているように見えた。液体が動くごとに、飛んで、跳ねて、形を変える。黒い液体の大きな怪物は、獲物である探索者を認識したのか、探索者の体に巻きひげのような触手が伸びてくる。それは先程、探索者がしたように探索者の口の中に飛び込んでくる。口を塞がれ、鼻も覆われる。ほんのりと甘い、しかしネバネバと不快な感触が探索者を窒息へ追い込む。ゼラチンのプールで溺れるような恐怖を覚える。

---

そこで、探索者は我に返るだろう。

SANC(1/1D6)

#### ▼エリーの周辺を見る

エリーを心配そうに見下ろす木箱の山の上に、白い封筒が乗っている。開封済みの封筒の中から、手紙のような物が覗いている。手紙は一枚だけ入っているようだ。字は、少し歪で、後に

調べればサーカス団員の誰とも筆跡は一致しないことが判明する。また、この言語は探索者の母国語でよい。（エリーも読むことができるように設定しておくこと）

[手紙]

お前が四回宙返りをできないこと、  
知っているよ。  
けど、それは人間という殻を  
破っていないからさ。  
その殻を破って人間を越えた時、  
お前はなりたい自分になれる。  
その覚悟があるなら、薬を飲むといい。  
全部飲めば今回の公演で成功するだろうし、  
飲まなければ成功するのは  
何年後になるか分からない。  
けど、いつかお前はその殻を破り  
飛ぶことができるだろう。  
遅かれ早かれ、お前は飛ぶのだ。  
しかし、今飛ぶことに意味があると思うのなら、  
飲み干すことだ。

手紙に対して<目星>成功、または裏面を見るという宣言があれば「ただし、飲むなら飛ぶ前にね」と手紙の裏に書かれていることが分かる。エリーは裏を読まずに飲んでしまったのだ。

#### ■エリーから聞けること

<応急手当>や<医学>などの技能で彼女を助ける、または探索者がある程度エリーに起こった出来事を調べたところで、エリーは喋れるようになる。彼女はまず、自分が瓶を持っていないことに気付き、瓶を渡してほしいと訴えかける。探索者が渡さない、あるいは飲んでしまった、捨ててしまった、などと言うのなら彼女はこの

世の終わりのような顔をして、「四回宙返りができる魔法の薬だった、のに……飲み干せなかった」と涙を流す。

彼女は、四回宙返りがまだ完成していないことに焦りを感じており、なんとしてでも成功させたいと思っていた。そんな時、老婆から四回宙返りができる魔法の薬を貰った。老婆は以前から時々エリーの前に現れ、親切にしてくれた。いつも気が付くといなくなっており、「シンデレラの魔法使いのお婆さん」のような存在だとエリーは思っている。エリーが老婆に騙されていると話すのなら、エリーは「貴方が言うのなら、そうかもしれない」と不安がる。

また、液体を飲んだことに関して「ドーピングである」と探索者が非難するなら、「それでも……だって、もう、縋るしか……どうしたらいいのか分かんないよ……だって出来ないんだもの！」と泣き出す。あるいは、ハッとして「そんなことにも気づかなかったなんて、嫌だ、周りが見えなくなっていたのかしら……でも、もうどうしようも……」とやはり泣き出す。彼女の泣き声を聞いて、パトロンがやって来るかもしれない。

エリーは話しながら立ち上がるが、バランスを崩して木箱の縁で足を擦りむき、傷を作ってしまう。

#### ▼エリーの体をよく見る

サーカステントの裏に置いてあった木箱の山が、彼女を見下ろしている。新しく作ってしまった擦り傷から痛々しく血が流れる、はずだった。傷から流れているのは、赤ではなく、黒だった。血の如く流れるそれは、黒い液体。それは、エリーが口から零していた液体と、瓶の中身の液体と似ているように思える。黒い液体

は彼女の傷口からじわりじわりと溢れ出している。これは、血なのだろうか。彼女の体の中に流れる血は、このような物なのだろうか？ 不気味な色の血液を見てしまった。(SANC1/1D3)

更によく見るなら、以下のことが分かる。

色は、「赤が酸化して黒っぽい」というレベルではない。真っ黒だ。しかも、粘性があるように思える。＜聞き耳＞で臭いを嗅ぐなら、それが大変臭く、血の臭いとも異なる。

### ＜医学＞成功情報

血液は酸化すると黒くなる。例えば経血は、体内で酸化して黒っぽく変色することがある。しかし、彼女の足の傷はついさっきできたものである。酸化するには早すぎる。しかも、経血でもない、ただの擦り傷から出た血だ。おまけに、赤が黒に変わったというレベルではない。完全に黒なのだ。こんなことは医学的に前例がなく、それが血液なのかも怪しいと感じるだろう。また、この傷は大したものではないので、放っておいても出血多量で死ぬということはない。

### ＜クトゥルフ神話＞情報

エリー、彼女は人間なのだろうか？ まさか彼女は、今まで自分たちに危害を加えていた生物たちと同じなのではないだろうか？と探索者は疑う。こんな色の体液が出ているなんておかしい。怪物なのではないか、いや、これから怪物になろうとしているのだろうか？ 分からないが、彼女は危ない……。彼女が危ないのか、彼女によって自分が危ないのか、それとも両方なのか。探索者は非常に嫌な予感がする。

エリーは自分の血液が黒いことを普通だと思っている。団長に髪の色や肌の色、目の色が違

うように血液の色も違って当然なのだと教えられていたのである。サーカスの面々も、エリーの血についておかしいと言ったことはなかった。探索者の反応を見て、自分がおかしいことにエリーは気付く。

その時、身なりのいい外国人の男性が別のテントから出てきてエリーと探索者を見つける。肩幅が広く、濃い髭を持ち、エリーよりも少し白っぽく輝く癖のある金髪。エリーとは異なる青の瞳は、冷たい湖の色だろうか。＜人類学＞に成功すれば、彼が東スラヴ人、つまりロシア人かもしれないと推測できる。

彼は、パトロンのイジャスラフ・イワノフだ。部外者である探索者がこの場にいることに驚き注意しにやって来るが、すぐにその視線はエリーの足に気づき、さらに驚く。

「どうしたんだ、エリー！ その血の色は！ 血が黒なんておかしい。元からそうなのか！？ それなら尚更おかしい！」

探索者が彼女の血の色について指摘していなければ、パトロンのように指摘する。

「ねえ、イジャスラフさん。私、違うわ。普通よ。本当よ。今までだってそう、何も変わらない。私は私よ……！」

「落ち着け、エリー！ く、来るんじゃない……！」

彼の薄く小さな唇は青く震え、瞳は悍ましい怪物を見たかのような恐怖に一瞬だけ染まる。しかしすぐにハッとして、彼女を拒絶してしまったことにショックを受けたような表情で、彼の顔は青ざめる。エリーはそのことで、己の異常さを初めて認識し、己に恐怖してしまう。

「私は一体、何者なの……？」



エリーは自分が何者なのか、老婆に騙されたのだとしたら自分はどうになってしまうのかと恐怖し、探索者に救いを求めるかのように縋る。パトロンは彼女に一瞬でも恐怖し、拒絶するかのような態度を取ってしまったことを恥じ、探索者に依頼をする。

もしここでエリーがまだ血のことや老婆のことを理解していなければ、パトロンを使ってそれを暴き、無理矢理探索者を巻き込むこと。一部始終を見ていた探索者の方が情報を掴みやすいだろうし、エリーが探索者の誰かの服を掴んで離さないことから探索者を頼っているのだか、そういった理由づけをして以下の依頼をする。

「どうやら、エリーは君（たち）のことを信頼しているようだね。すまないが、どうかエリーの恐怖を取り除いてくれないだろうか」

エリーの血が黒い原因を探る。彼女は元から血が黒かったらしい。それを何故エリーが変だと思っていなかったのかを明らかにし、彼女の不安を解消することが目的である。また、彼女の飲んだ黒い液体が一体何だったのかも調査してほしいと言う。

彼の依頼を受ける報酬として、探索者のサーカスのチケットが入手できるかもしれないし、ビジネスで利益を得られるかもしれない。エリーを助ければ、何らかの利益があることは間違いない。あるいは、エリーの出生など詳しいプロフィールは公開されておらず、それを探るチャンスかもしれないとも思うだろう。

パトロンは「ごめんよ、エリー。驚いてしまったけど、僕は知らなかったんだ、君の血のこと、君のこと。もっと早く気付いてあげられれば……」と、エリーに謝り、エリーと探索者をエリーのキャンピングカーに誘導する。

詳しい話はそこで行う。

## 07.探索にあたって

探索開始となるのは、午後15時からである。それまでは、探索者はエリーのキャンピングカーでエリーやパトロンと話をすることになる。

### ●パトロン イジャスラフ・イワノフ・スヴァトスラフについて

彼は白鳥サーカス団に投資している芸術好きの資産家、大富豪の息子である。あくまで投資しているだけなので、白鳥サーカスの内部事情を全て知っているわけではないし、ある程度の人間関係くらいしか把握していない。彼も熱狂的なエリーのファンだが、エリー自身というよりは、空中ブランコ乗りとしてのエリーを大変気に入っている。故に、彼女のプライベートに関してはまったく知らない。

彼は1年前からこのサーカスに投資をはじめ、ロシアやその周辺での公演の際は必ず訪れている。今回は初の日本公演だったので、足を運んだ。

### ▼病院に連れて行く

病院に行って医者に診せようとするなら、パトロンが止めるし、エリーも拒否する。ドーピングがバレたらサーカス団の評判が下がるだろうし、病院へ有名人である彼女が行けば騒ぎになることは間違いない。また、病院に連れて行く場合、リハーサルを蹴ることにもなるので無断では出られず、団長に話をしなければならぬ。団長は探索者がどのように話をしたとしても、病院へ行くことを許さない。エリーがその場にはいないなら、エリーが実験体にでもされたらどうするんだ、私の天使をどうす気だ！と怒鳴る。信用できる医者にしかな診せられないと言

い張る。この時彼に真相を問い詰めようとして交渉技能などを使っても、無意味である。彼は現実から目を背け、探索者の言うことに耳を貸そうともしないのだから、交渉の余地もないのである。彼に<精神分析>を試みるのであれば、彼がエリーに大変執着しているということ、他人の話を聞こうともしないということが分かる。

もし強引にエリーを連れて行こうとするならば、団長は探索者に攻撃をするだろう。エリーにも「逃げろ!」と命じる。エリーは迷うそぶりを見せるが、団長の言うことを聞くだろう。

また、連れ出せたとしても探索者とエリーを、マスコミが見つかるかもしれない。エリーは有名人である。そのことを忘れてはいけない。マスコミに揉みくちやにされ、かなりの時間を食うだろう。こうなると、その後の調査にはかなり制限をかけるべきだ。団員からの印象も最悪になり、聞き込みは困難を極めるだろう。

エリーは血が黒いことに関して「かかりつけのお医者さんも何も言っていなかったわ。私は健康体よ。勝手に医者に行ったら団長が怒るから嫌」と主張する。かかりつけの医者はドイツにいて、今は会えないだろう。医者の名前は、グレートヒエンという。

探索者の中に個人医院を持っている者がいる場合、交渉技能成功でエリーを連れ出し診察する許可を得られるかもしれない。ただしその場合、診察とその結果を出すのに半日はかかる。半日かけて得られる情報は、彼女が健康体であるということ。彼女の血液に関しては、前述した<医学>などの情報が出る。この結果から導き出される答えは、エリーが人間ではないかもしれないということだ。SANC(1/1D3)

## ■エリーから聞けること

エリーは団長のバートランドに拾われた、捨て

て子だったらしい。彼女は生まれた時から、このサーカスの一員だった。サーカスの団員達は家族のように接してくれている。

猛獣使いのジャンがよくライオンに噛まれていたが、その時に流れている血が赤だったことは知っている。しかし、髪の色や瞳の色が違うように血の色も違うのだと思ったし、そのことを団長に言ってもそうだと肯定された。他の団員も、エリーの血を見ても特におかしな反応は見せなかった。

老婆は、エリーが大きな公演をする前に必ずどの国だろうと現れ、励ましの言葉をかけてくれた。今までは特に奇妙な贈り物はくれなかった。彼女は占い師と名乗っており、エリーと同じように世界を旅しているという。

また、液体を飲んだ時に白昼夢のようなものを見たことを告げる。それは、前述した▼**黒い液体を飲む**と同じ内容である。また、そういった内容の夢を最近時々見るようになっている。プレッシャーが見せた悪夢だと思っていたが、そうではないのだろうかと不安がる。

## <精神分析>または<心理学>

彼女の悪夢はどんな精神状態から来るものなのか? エリーによくよく聞いてみると、白昼夢の内容を断片的に一カ月前から見始めていたようだ。夢占いの観点から考察すると、不安なことがあってそれに立ち向かわないといけなみたいな精神状態ではある。

## ■パトロンから聞けること

パトロンは探索者がエリーと話している間、探索者のことを団員達に伝え、調査しやすいように根回ししてくれる。

彼は団長のことが苦手である。というのも、エリーと会話しようとすると、団長が邪魔をし

てくるのだ。エリーはそのことに気づいていないようだが、まるでパトロンからエリーを守ろうとするかのように、さりと間にいられてしまうのだという。確かにエリーは美しいが、うら若き乙女を手中に収めようなどとは思っていない彼にとっては心外である。団長のエリーに対する執着は異常であり、父親のそれとは少し違う感覚を覚えたという。

他の団員達はエリーに対して普通に接していると思うが、実際どのように考えているのかわからないし、どこまで彼女のことを知っているのか不明。彼らに探りを入れるのがいいのではないかとアドバイスをくれる。

きりのいいところでパトロンが時計を見て、エリーにリハーサルの間ではないかと彼女を外に出よう促す。エリーはキャンピングカーのカーテンを閉めて着替える。着替え終えて出てくる際、イベントの■エリーの状態(2)を発生させる。これは、<目星>を要求し、成功したら気づかせるという方がいいだろう。あるいは、彼女に変化がないか注意深く見ているという宣言があれば、技能なしに気づいてもよい。彼女もパトロンもまだその変化に気づいておらず、指摘すると「さっき瓶の中身を飲んだ時に転んでしまったから、その時の痣かしら？」とエリーは慌ててタイツを穿いて隠し、リハーサルのため大テントへ向かう。

パトロンも、「普段通りにしてないと怪しまれてしまうだろうから、私は私の仕事に戻るとするよ。私は自分なりに、この白鳥サーカス団を愛しているし、大事に思っているんだ。それだけは信じてほしい」と言った後、「君たちにはこれをあげよう。売り切れてしまったチケットだ。しかも特等席。エリーが君たちのおかげで照明を浴びることができるのなら、それを見る権利が君たちにはあるだろう」とチケット

を人数分渡してくれる。それとは別に、お金も貰える。金額はKPとPLに任せる。ハンドアウトごとに欲しい報酬が異なる場合は、なるべく願いに沿うようにすること。

## 08.イベント

ここでは、エリーが怪物になるまでの体の変化についてと、探索者が黒い液体を飲んで体に入れたままであった場合の悪夢の描写についてを記した。適宜、情報を出すこと。

### ■エリーの状態

ニョグタの落とし子としての変化の表れは、体に黒い斑点が浮かび上がるといったものである。この斑点は、痛みも痒みもない。触ると、斑点のある部分は少し体が柔らかくなっているつまり、皮膚の下の肉が徐々に粘性を帯びたニョグタの液体で満たされていく。この変化のおかげで、彼女は人間としての限界を超え、怪物としての力を得ることになる。斑点は内出血のように見え、衣装やメイクで隠すことができる範囲の薄さである。探索者がこの変化に気づかない場合、エリーは(4)の状態になって初めて自分で気づき、探索者に見せるか教えるかする。

- (1) 探索者と遭遇してすぐ：変化なし
- (2) 探索にあたっての終了のタイミング：脚に黒い斑点が浮かび上がる
- (3) 探索者が帰る際：背中の中分くらいまで
- (4) 翌日朝：腕まで
- (5) 本番前：首より下は全て黒い斑点が浮かんでいる

## ■悪夢

この悪夢は、エリーが見るものと同じである。エリーは、この夢の内容を2日目に探索者に伝える。

探索者は暗い洞窟のような場所にいる。辺りははじめじめとしており、何かの気配を闇の奥に感じる。闇と同化するように現れたのは、ドロリとした粘性の醜悪なシルエットであった。それはただの液体なのだろうか、否、意思を持って動いているように見えた。液体が動くごとに、飛んで、跳ねて、形を変える。

闇のプールの中から、何かが顔を出した。一瞬、汚い沼から黒い白鳥が飛び出したのかと探索者は思うだろう。しかし、翼に見えたのは左右に広げられたしなやかな腕だった。真っ黒なそれは、次の瞬間、豹のように形を変えて、探索者の方に飛び掛かる。しかし、それは探索者のすぐ隣に飛び込むと、プールの中をすいーっと泳いでいる。まるで鮎のようだった。そうして、波を起こしながら再び探索者の前にそれは現れる。黒い巻きひげを絡めた黒い腕が、探索者の口にねじ込まれる。探索者は強烈な吐き気に襲われるだろう。

そんな極限状態になった時、<聞き耳>を要求。成功で、洞窟のどこからか多くの人々の声がすることに探索者は気づく。それは外国語（ドイツ語）で、何かに祈りを捧げる詠唱のような言葉に聞こえた。

そこで、探索者は目が覚める。（SANC 1/ 1D6）

## 09.探索

探索は午後15時からのスタートだ。最初、探索者はエリーのキャンピングカーにいる。探索箇所は秘匿しておくべきだが、その場所についての情報が出たら行くことができているだろ

う。白鳥サーカス団は、広場の一部を借りて公演を行う。大テントで公演が行われ、エリーはそこでリハーサルをしていることだろう。また、昼間探索者とエリーが出会ったのは広場で、老婆を見かけたのは裏道だ。

### 探索箇所

#### ◆白鳥サーカスのいる広場

1. エリーのキャンピングカー
2. 大テントの外
3. 大テント
4. 物置として使われているトラック
5. 広場
6. 裏道

#### ◆図書館

### ◆白鳥サーカスのいる広場

#### 1. エリーのキャンピングカー

サーカスらしい鮮やかな衣装や小道具などが置いてあるが、女の子らしい車内となっている。化粧台には写真が貼られており、机には花や手紙が山盛りになっている。

## ■衣装

現在エリーが使っている服だろうか、練習着のような物から白鳥を思わせる純白の翼のついた衣装、豹柄の衣装、水色の飛沫柄の衣装などがハンガーにかかっている。

その背後には、先ほどまでエリーが着ていた私服が投げ捨てられている。コバルトブルーのワンピースに、黄色のタイツが抜け殻のように落ちている。タイツは、転んだせいで破れてしまっている。破けたタイツに黒い血が滲んでいる。少量なので、触ってもよく分からないが、<聞き耳>で臭いを嗅ぐと不快な臭いを放ってい

ることが分かる。タバコの臭いに近いが、リンゴの腐った臭いにも感じる。

### ■化粧台

化粧台の上には、多くの化粧品が置かれている。可愛いデザインの水色やピンク、エメラルドグリーンの香水瓶が多く、どれもいい香りだ。

化粧台の鏡の周りには、エリーや彼女と写る団員達の写真が貼ってある。どの写真も、楽し気な雰囲気が伝わってくる。以下は、写真の描写である。

・サーカスの会場で撮ったらしい、ステージに立ってエリーと肩を組む、エリーより少し年上くらいの少女との写真

・ライオンを撫でる幼いエリーと、ライオンの首輪に紐を通すおじさんの日常的な雰囲気の写真

・空中ブランコの練習をする一人の女性と幼いエリーを、団長らしき男性が見守っている写真。探索者はこの女性に見覚えはない。

<アイデア>成功で、エリーの他にこのサーカスにいる空中ブランコ乗りは現在、キルスティンという少女だけである。この写真に写っている女性は、かつて空中ブランコ乗りであった女性で、現在は辞めたのかもしれないと思い至る。

・誕生日ケーキをエリーの前に差し出すピエロと、蝋燭を吹き消そうとしているエリーの写真

・空中ブランコ乗りのキルスティンとエリーが私服姿で写っている。背景にラスベガスの夜景が写っている。

### ■机

机の上にはファンから貰ったであろう花や手紙が置かれている。<目星>成功で、中に埋もれているエリーの日記を見つけることができる。この日記はドイツ語で書かれているが、<ドイツ語>技能を持っているのなら成否関係なく読むことができよう。持っていない者は、ドイツ語辞書などを用いて1時間かければ読むことができる。

[エリーの日記]

○月×日

ライバルの星屑サーカスの空中ブランコ乗りが、ついに三回宙返りに成功した。三回宙返りは世界中で私しかできなかったのに。私が唯一の、最高の空中ブランコ乗りだったのに！

○月×日

星屑サーカスにお客が流れていってしまった。団長はとても悔しそうだった。私だって、すごく悔しい。皆は大丈夫だよって言ってくれたけど、そんなはずない。皆だって悔しいし悲しいの、我慢してるんだわ。私はまだ誰もできたことのない四回宙返りを成功させなければならない。そうすれば、お客さんは戻ってくるはず。「空中ブランコ乗り」と言われれば私、エリーでなければならない！

○月×日

どうやっても四回宙返りはできそうにない。命綱がなければ落ちてしまうところだった。何で、あと少しが、駄目なんだろう。



○月×日

キルスティンが空中ブランコをやりたいて言ってきた、とても驚いたわ。

けど、彼女も身体能力は高いし、いいんじゃないかしらって団長と一緒にお願いにいったら、許してもらえた。

今日から一緒に練習できるの、楽しみ！でも、私負けないわよ。世界で一番の空中ブランコ乗りは私なんだから！ビシバシ愛を込めて教えちゃうわよ。

○月×日

引退してしまった空中ブランコ乗りが言っていたのを思い出した。

三回宙返りでさえ難易度が高いというのに、ましてや四回宙返りなんて人間ができるものではない。鳥でもない限り、四回宙返りなんて無理だと。

できる人がいたら、それはきっと人間ではない。だからやめてしまえと。

やったら死んでしまうよ、と。

それでも私は、どうしてもやらなければならない。

飛びたい。

でも、人間じゃないって何だろう？鳥になれるのかしら？

鳥だったら、なってみたい。

けど、それじゃ空中ブランコ乗りじゃなくて、ただの鳥だわ。

それは私じゃない。エリーじゃなきゃ。空中ブランコ乗りのエリーじゃなきゃ、嫌だな。

で（この<図書館>には時間はかからない）、またはパトロンや団員たちに聞けば以下のことが分かる。あるいは、白鳥サーカスのファンである探索者なら<知識>で知っていてもいい。

星屑サーカス団は時々白鳥サーカスと同じ国で同じ日に公演を行い、集客数を競っている。演目や演出までも白鳥サーカスの真似をしている。規模は白鳥サーカス団と同じくらいだが、最近世界中でただ一人エリーしかできなかった三回宙返りを、星屑サーカスの空中ブランコ乗りが成功させたことでそちらが注目されている。

## 2. 大テントの外

リハーサルが行われている大テントの外では、自主練をする団員達の姿がある。みんな、エリーと共に写真に写っていた者達だ。

綱渡りの娘のマーシー、猛獣使いのジャン、ピエロのペトル、もう一人の空中ブランコ乗リキルスティンに話を聞くことができる。団長はエリーと共に大テントの中にいるので、ここでは話すことはできないし、今呼び止めるのは良くないと団員達は止める。全員日本人ではないが、日本語は喋れる。（日本語は、探索者の母国語に変更可）

### ■もう一人の空中ブランコ乗リ キルスティン

黒地に赤や青に光る飾りのついた衣装を身に纏う彼女は、探索者に気づくと真っ先に話しかけてくるだろう。トランプを使った手品を見せてくれる。

彼女はもともとは手品師としてこのサーカスに1年前に入団したが、星屑サーカス団の汚いやり方に対抗するべく、空中ブランコにも挑戦し始めた空中ブランコ乗リ見習いである。また、

### ▼ライバルの星屑サーカス団について

インターネットで検索する場合<図書館>成功

「エリー先輩マジリスpektotts! 」とエリーを尊敬している。

エリーの血のことは知らされておらず、聞くと「それはミステリアスでオカルティックですね! そういったオカルティックな話なら、あの有名な占い師であれば何か知っているかもしれないっすけど……自分じゃお役に立てそうもないっす」と頭をかく。占い師について尋ねると、神出鬼没の占い師、名を石須真里亜という。見ただけでその人の様々なことを、まるでその場を見ていたかのように言い当てる、腕の確かな占い師。イスラム圏の出身らしく、煌びやかで怖いくらい美しい。特定の場所で占いをしていることはあまりない。キルスティンは遭遇したことがないが、以前はラスベガスにいたと噂があり、様々な国に姿を現すという。

彼女は四回宙返りについて、とてもじゃないが無理だと思っている。エリーならできそうな気もしているが、あれは人間の限界を超えた技であり、手品や魔法でも使わない限り不可能だという。彼女はまだ二回宙返りしかできないが、その倍がどれだけ大変か考えただけでも気が遠くなる。それに挑戦し、できそうだと思うせるエリーのパワーは凄まじいものだ。できたなら、きっと星屑サーカス団に真似などされなくなるだろう。

以上のことを言うと、テントの中からキルスティンを呼ぶエリーと団長と思わしき男性の声が聞こえる。「いっけね! それじゃ、あたしはこれで～」と、彼女は一瞬で中に消えてしまう。

### ■綱渡りの娘 マーシー

ピンクの衣装を着て傘の上で玉を回す彼女は、エリーと最も親しく、エリーの姉的存在である。ツンデレでもある。

彼女は光と喝采を浴びることだけが生き甲斐であり、エリーも自分と同じだと思っている。危険だからといって命を賭けないピエロが滑稽であると感じている。

エリーはどうしても四回宙返りをしようとしているが、あれは人間ができる技ではないと理解している。だが、人気が落ちることをエリーは耐えられない。エリーはブランコから落ちても四回宙返りをしたいのだろうということは、同じ危険な技をやっている彼女には分かる。そして、星屑サーカスの空中ブランコ乗りに負けてほしくないと思っている。

綱渡りの娘は命綱をつけて綱渡りに挑んだことはない。命綱をつけた時は絶対落ちるが、つけない方が集中力が増して成功に近づくという。「落ちてもマットが敷かれているので骨折くらいで済むし、大丈夫よ」と言うが、彼女は一度も落ちたことがない。

エリーのことは「べ、別に妹みたいで可愛いなとか思っないし! 最近プレッシャー感じてそうだから差し入れにあの子の好きな抹茶アイス?とかいうのを買ってあげようとか考えてないから! 」といった様子で、可愛がっているようだ。

エリーの血について聞かれると、「それを聞いてどうすんのよ」と探索者を睨みつける。空中ブランコ乗りとしてのエリーが注目されるのは喜ばしいことだが、血の黒い彼女を見世物として扱うのであれば絶対に許さないと彼女は警戒する。しかし、そうでないと分かれば彼女は確かにエリーの血は黒く、そのことを団長に黙っておくよう言われたことを認める。しかし、血が黒いことで今まで何か問題が起こったことはなく、怪我をしてもすぐに回復していたことを教えてくれる。もしかしたら、彼女の身体的能力の高さはあの血によるものなのかもしれないと考えたこともあるが、彼女の努力なくして

今の彼女はいないのだと明言する。どれだけ才能があっても、活かすための努力をしなければ意味はないのだ。

彼女は、エリーに四回宙返りを挑戦してもらいたいと考えている。たとえ、それで万が一命を失うことになっても、本望だろうと。

### ■猛獣使い ジャン

彼はこのサーカスに古くからいるおじさんである。毎日が目まぐるしく、昔のことは残念ながら忘れちゃった、といった少し間の抜けた癒し系。太ったお腹は柔らかい。

エリーは18年前に団長が拾ってきた子で、ヨーロッパ圏での公演をしていた時だった。拾われた時、エリーは赤子だった。エリーは幼い頃からサーカスの花、空中ブランコ乗りとして注目され続けていた。プレッシャーにも負けず、一生懸命要望に応えようとしていた。彼女は空中ブランコ乗りとして必要とされ続けていた。彼女に空中ブランコの技を教えたのは既に引退してしまった女性であり、彼女は三回宙返りを練習中に一度成功させたが、四回宙返りに挑戦しようとして失敗したことで飛ぶことに恐怖し、サーカスを辞めてしまった。今はどこかの国で誰かと結婚し、空中ブランコ乗りとしてではなく一人の女性として幸せに暮らしているだろう。彼女曰く、四回宙返りは人間には絶対にできないらしい。

団長はエリーを溺愛していて、その執着心は他の団員に向けるものとも違う。父親のような存在でありながら、きっと彼は赤子であるエリーを見つけた時から彼女に恋をしていたのではないかな？と微笑む。「ああ、でも。恋は盲目と言うよね。それってちょっと怖いことじゃないかな、おじさんはそんな恋したことないから分からないけどね」と冗談めかして言う。

時々会話の合間にライオンに噛まれているが、あまり気にしていない。出ている血は赤い。エリーの血のことを聞くと、彼は黙り込む。それでも問い詰めようとする「君たちのそれは、差別とかそういったものなのかな。物珍しいからと、怖いもの見たさで首を突っ込もうとするのならやめた方がいい。僕は何も知らないし、そのことを深く知ろうとも思わないからね。いくら家族みたいなものだからといって、すべてを知ろうとするのは違うと思っているから」と言って、探索者から離れていく。

### ■ピエロのペトル

赤い鼻、左目に黄色の星マークを描いた彼は、口も態度も身も軽い青年である。綱渡りの娘とは喧嘩友達（あるいは軽蔑されている）だ。

エリーのことを聞かれると、彼は明らかに動揺する。彼は団長がエリーの出生について隠しているということを知ってしまい、それを秘密にするように団長から厳しく言われている。＜心理学＞を用いてもいいが、RPで彼がエリーのことについて聞かれると挙動不審であることを分からせるようにKPは心がけてほしい。「別にエリーの秘密とか何も知らねえし……あっ！や、違う今の無し！」といった具合に。KPの納得するRPであれば技能なしで教えていい。暴力に訴えかければおそらくすぐに吐く。賄賂でもいい。

団長が隠しているエリーの秘密は、一番古い物が保管されている物置のトラックに眠っているという。たまたまそれらしき物を見つけてしまったとき、団長に「今見たものは忘れる。でなければこのサーカスから追い出してやる」と脅されたという。彼はトラックの場所を教え、鍵を貸してくれる。その中にある本棚のどこかに、エリーの秘密が隠されている。彼は「エリ

一の血はもともと黒い」といった内容の書かれた手記のような物を見たというだけで、内容をすべて知っているわけではない。鍵は必ず返すように、そしてトラックに入ったことは秘密にすること、と言われる。

ピエロは綱渡りのマーシーとは反対に、命を懸ける技を自分では絶対にしたくないと思っている。また、四回宙返りをしようとするエリーを彼だけが止めたことがある。

「人気なんて落ちたって死なないだろ。けど、お前はブランコから落ちたら死ぬんだぜ。綱渡りも馬鹿だけど、お前はそんな馬鹿じゃなかったはずだろ？ やめとけ、落ちるなら俺みたい玉から落ちるくらいにしとかないと」するとエリーは「人気が落ちるのは、寂しいし悔しいことだと思うわ。お客さんに拍手してもらえないくらいなら、私は……」といった感じで、まったく話にならなかった。

エリーは「普通である」ように振る舞えと団長に言われているし、団員達もエリーがいい子なのでそうしているが、本当にそれでいいのかと彼は思っている。「団長が隠していることが分かったら、エリーに言ってやってくれ。その方が面倒くさいことにはならねえだろう」と探索者に言う。

### 3. 大テント

大テントの中では、リハーサルが行われている。客席には誰もおらず、中央のステージはバルーンアートで飾られている。

エリーは四回宙返りの練習をしているようだ。ブランコに足を引っ掛け、逆さまの状態で大きく弧を描き、キルスティンのいる反対側のブランコに手を伸ばす。キルスティンの手を伸ばすタイミングも、身を乗り出すタイミングも完璧だった。エリーはブランコから豹のように飛び

出す。否、鮎のように宙を泳いだ。否、それはまさに翼を広げた鳥だった。一回、二回、三回、彼女の体が回る。そうして四回目を回り腕を伸ばす。

「エリー先輩！」

「キルスティン……！ ああっ……」

エリーの手はキルスティンの手を掴むことができず、高い場所から地上へ落ちていく。羽をもがれた天使が、地に落とされるかのようだった。しかし、彼女の体はぷらーんと宙に残される。命綱をつけていたのだ。

「せんぱ〜い！ ごめんなさい。あたしのタイミングが……」

「ううん、キルスティンは今ので完璧よ。問題ないわ。団長、もう一度やってもいいかしら」

地上から二人を見守っていた、シルクハットを被った背の高い男性が少し悩んだ後言う。

「よし、エリー、キルスティン。もう一度だ。

エリー、きっと君なら成功する」

「ええ、そうよね、団長。私、きっとやれるわ！ よーし」

再び練習が再開される。話しかけられる様子ではない。彼らの様子は真剣そのものだ。

### 4. 物置として使われているトラック

このトラック内で失敗やファンブルが発生した場合、あるいは時間経過で■トラックの外でを起こしてもいいかもしれない。必須ではないので、KPの判断に任せる。

サーカスに使われる道具がごちゃごちゃと積み上げられているが、その奥に本棚があるのが見て分かる。また、本棚の周りだけ少しスペースがあり、そこだけ埃が積もっていないことが分かる。その周辺には、小さな幼児用の衣装が飾られている。壁には子供が描いたのだろうサ

ーカスの絵が額に入れられて飾られている。棚の上にはオルゴールが置いてあり、螺子を回してみると、エリーによく似た人形が踊る。その隣で、ラッパを吹くシルクハットを被った男の子の人形が回っている。箱から流れる旋律は、ノスタルジックだがどこかサーカスの華やかさを思わせるものだ。

本棚周辺に目をやると、力任せに破かれて読めなくなった絵本がある。かろうじて読めるタイトルは『見世物小屋のネルソン』となっている。内容は解読できないほど、ボロボロだ。後に、このタイトルから本を探すという案が出ない場合、<アイデア>などで気付かせ図書館へ行くようにさせること。

本棚に<図書館>成功で、18年前の団長の日記を見つける。これが団長の日記であろうと推測できるのは、日付と Eliy という単語が多くあるということに気づけるからだ。これは、<英語>で書かれている。技能を持っている探索者は普通に読むことができるが、技能を持っていない者は辞書を使って1時間かけて読むことができる。本棚に各国の辞書が並んでいることにも気づいていいだろう。

[18年前のエリーに関する日記]

○月×日

ドイツでの公演を終えて次の国へと向かう晩のことだった、赤ん坊がテントの前に捨てられていた。

ついさっき産み落とされたのか？ それにしてはおかしい。

血に塗れているのならまだ分かるが、彼女は黒い液体に塗れていた。黒い液体はとても不快なはずなのに、それに塗れながらも懸命に声を上げる小さな命はとても美しく、愛しく感じた。

彼女が何者なのかは分からないが、私のもとに舞い降りた天使に違いない。エリーと名付け、大切に育てよう。

○月×日

エリーの血はネバネバとしていて黒く、すぐにゼラチン状になって固まってしまう。病気かと思ったが、傷の治りが早いのはむしろいいことだ。

きっとこのせいで、彼女は捨てられてしまったのだろう。可哀想なことだ。

○月×日

エリーはとても体が柔らかいうえに、筋力もある。誰をも惹きつける魅力がある。

彼女は空中ブランコが適性だろう。明日、空中ブランコ乗りに指導をしてもらおう。

彼女はサーカスの花になるはずだ。そして、私の天使であることには変わらない。

○月×日

エリーが初めて客の前で空中ブランコを成功させた。小さな手でブランコを握りしめ、宙を舞った姿に誰もが拍手した。さながら鳥のようでもあり、豹のようでもあり、鮎のようでもあった。

彼女に誰もが釘付けになる。私はこの日の為に生きてきたのではないだろうかと思った。彼女は空中ブランコ乗りとしての居場所を確立できたのだ。観客に負けないくらい、割れるような拍手をして泣いた。

○月×日

彼女が捨てられていたドイツに戻ったの公演を控えた前日、私は奇妙な夢を見た。

地下の洞窟には、黒くネバネバとしたゼラチンのようなおぞましい存在がいた。初めて見る



物のはずなのに、なぜか見覚えがある気がした。そんなわけない。そんなわけあってたまるか。嫌な予感がして、かかりつけの医者グレートヒェンに手紙を書いた。

○月×日

グレートヒェンから返事の手紙がきた。眩暈がした。

“黒い血の怪物”なんて、そんなものは存在しない。ネルソンなんて、あんなの、あれはただのお伽新だ。あんなもの、絵本の中の、偽物の、デタラメだ。真実なんかじゃない！

エリーは人間だ。サーカスの天使だ。怪物だなんてとんでもない！ エリーは天使だ悪魔になんてなるものか、ふざけるなふざけるな、違う何かの間違いだそんなのあるわけない、エリー エリー エリー

○月×日

エリーはエリーだ エリー エリー エリー  
私のエリー 私の天使

この日記を読んだ後、グレートヒェンからの手紙を探すと明確な宣言があった場合のみそれを探すための<目星>を認める。宣言がない場合は、<アイデア>でそのことに気付かせていい。

グレートヒェンの手紙は、ドイツ語で書かれているので<ドイツ語>に成功する必要がある。成功内容は以下の通りである。また、読むことができない場合図書館でドイツ語辞書を使って1時間かけて解読するか、<アイデア>成功でエリーがドイツ語が分かることを思い出してもいい。他の言語に関しても、NPCに読んでもらうという手があるだろう。

[グレートヒェンからの手紙]

パートランド・ケージ様

エリーのように黒い血が流れている人間を、私は前にも見たことがあるわ。

子供のうちは少し変わっているだけなんだけど、大人になるにつれて黒い血の怪物になって、大人になる頃には親のもとに帰ってしまうの。

それは止められるものではないし、彼らに自分が怪物の子供であるという自覚はないみたい。

だから彼女がまだ人間のうちに殺してしまうのが正しいと思う。あなたはきっと、それを望まないだろうけれど。私だってそんなの嫌よ。

けど、あなたの今まで一緒にいた他の団員達、そしてあなたも必ずいつかは出会うことになるのを忘れないで。

エリーじゃない、あなた達の命を狙う、怪物と。

そしてこれが最も重要。親の血を飲むと、怪物の子供のタイムリミットは一気に減る。量にもよるけれど、牛乳瓶一杯分くらい摂取したら、2日くらいしか持たないわ。

これ以上詳しいことが分かればまた手紙を書くけど、期待はしないでね。

グレートヒェンより

エリーの身に起ころうとしている信じられざる事実が秘匿されていたこと、そして最悪の状況になってしまっていることに気づいた探索者はSANC(1/1D3)

#### ▼グレートヒェンについて調べる

彼女のことはサーカス団全員が知っている。彼女はドイツに住む女医で、何度かドイツに立ち寄った時に団員が診察を受けている。エリー

も彼女に診てもらった。

探索者が彼女と連絡を取ることは手紙以外では不可能である。サーカス団員は彼女の家住所しか知らないのだ。調べても、彼女のことはそれ以上分からない。

### ■トラックの外で

緊張感を出したい場合、あるいはなかなかトラックから探索者が出ようとしない場合、このイベントを発生させてもいいかもしれない。

まず、トラック内で<聞き耳>を要求。成功すると、外で誰かが会話しているのが分かる。失敗し探索を続けようとするなら、トラックの扉を誰かが開けようとしていることに気付くだろう。<隠れる>技能があれば隠れてもいいし、内側から鍵をかけるなどの宣言があったなら問題は無いだろう。

いずれにせよ、扉が開こうとした瞬間、ピエロが「あ～～～しまった！物置トラック開けっぱなしにしてたのに鍵どっかに落としちゃった！さっきそこで練習してた時かな！？すみません、団長～。みんなも、悪いけど一緒に探してくれない？多分あっちだと思うんだよね～」とピエロが団員達を遠ざけてくれたことが分かるだろう。

### ▼団長と話す

探索者が物置の探索を終えた段階で、団長に会おうとするなら会うことができる。彼はペトルやジャンと談笑している。彼に話しかけると、「君たちがエリーを見てくれているんだってね。イジャスラフから聞いたよ。最近の彼女は少し元気がなかったように見えたからね、たまには気が利くじゃないかあの男も。とにかく、よろしく頼むよ」と探索者に笑いかける。しかし、<アイデア>成功でどこか探索者たちを警戒し、

特に男性探索者には心を許していないように思える。

エリーが自分の出生について知りたがっていることを聞くと、顔色を変え「そんなものは知らなくても何も問題はない。あの子は可愛い私達サーカスの宝だ、天使だ。過去のことはいいんだ、輝く現在を大切にすべきだとは思わないか」などと怒る。探索者がどのような正論を述べたとしても、彼は聞く耳を持たない。彼は現実から目を背け、探索者の言うことに耳を貸そうともしないのだから、交渉の余地もないのである。彼に<精神分析>を試みるのであれば、彼がエリーに大変執着しているということ、他人の話を聞こうともしないということが分かる。

## 5. 広場

探索者とエリーが出会った広場。1日目の15時以降はサーカスの宣伝もなく、人は疎らだ。老婆の姿を見たか聞き込みをしても、手がかりはない。占い師について聞き込みをすると、占い師のような恰好をした若い外国人女性の目撃情報を得ることができる。彼女は、サーカスの宣伝をしている時に、人込みの中にいたという。

## 6. 裏道

老婆のいた場所。人気はまったくない。老婆のいた辺りに<目星>成功で、一枚の羊皮紙が落ちていることに気づく。そこには、日本語で以下のように書かれている。この字は、老婆の手紙の筆跡と異なる。

教えてあげて あの娘の真実の姿

選択の余地はまだある

なりたいたい自分になれるはず

また、探索2日目の開演前になると、以下のイベントが発生する。探索者がエリーに真実を話にサーカスへ向かう際、この道を通るだろう。

### ■謎の占い師登場

暗い道に、一つ灯りが見える。万華鏡のように色鮮やかなトルコランプをピロードのテーブルクロスの上に置く、占い師のような恰好をした女性がいた。彼女は煌びやかなベリーダンス衣装に、多くのアクセサリを身に着けている。近づいてみると、タロットカードでタワーを作っている。探索者に気づくと、「あら、お客さんかしら」と話しかける。

彼女こそ、占い師、石須真里亜である。しかし彼女はすぐに「正確には、お客さんだった、のよね。今のあなたは、役者？ それとも演出家なのかしら？」と訂正する。

老婆のことを尋ねると「私あの人嫌いよ。余計なことばかりして、舞台を引っ掻き回すとなんでもない舞台監督さんね。人の気持ちなんて何も考えちゃいないんだから」と述べる。

「あの人は悪い魔法使いってところね。え？ 私？ 私はただの占い師。良くも悪くもないし、導くだけ。結末はあなた達が決めること、そうでしょう？」

探索者が真相にたどり着いていない場合「それは私が教えるべきことじゃないから、教えられないわ。あなたの知りたいことは、全て手の届く範囲にあるわ」と言い、真相にたどり着いていて更に情報を欲しがらる場合「それ以上も何もないわ。それが真実、それが全てよ。あなた達の得た真実をどう受け止め、どうするかが問題」とだけ言う。

エリーを助けたい、と言われると「助けるって、なあに？ 具体的にはどうしたいの？ 団長のように真実を隠して、彼女の知る権利を奪い現実から目を背けて天使だと崇めるの？」と試

すように尋ねる。否定し、彼女が怪物にならないようにしたいと述べるなら「それは無理よ。分かっているでしょう、いずれはなるのよ、必ずね。それは変えられない彼女の運命、彼女の本当の姿はそう遠くない未来にあったのよ。その時間が縮まってしまっただけ。今夜を逃したら、選択の余地はもうないわよ。残念だけれどね」と諫める。それでも諦められないと言うのなら、彼女は暫し思案した後、コバルトブルーの湖のように煌めく液体の入った香水瓶のような美しい瓶を差し出す。

「これを飲ませれば、彼女が怪物になるタイムリミットが元通りになるわ。元通りになるだけよ。いつかは怪物になるし、それがいつなのかはこれを飲むことで分からなくなってしまうでしょうね。服用方法は、彼女を愛する人がこれを渡し、飲ませること。あなたは彼女を愛しているのかしら。あ、団長とか他の人に渡させるのは無しよ。それならこの薬はあげない。なんでもかんでも都合のいい魔法なんてない。それでもあなたが挑戦してみたいというのなら、私は止めないわ。けれど、それは彼女とよく話し合ってからの方がいいでしょうね」

エリーは四回宙返りを成功させられるか、という問いには「彼女が人間のうちは飛べないでしょうね。成功したら、その時にはもう怪物よ。けれど、今はまだ人間に似て非なる存在だわ。……あのいけすかない舞台監督さんのことでしょうか、怪物になるタイミングは最悪の時でしょうね。おそらく……彼女が飛んだ後じゃないかしら？」と答える。「もちろん、あの液体を全部飲めば、本番で四回宙返りが成功するでしょうね。けれど、それが何を意味しているかは、分かっているわよね？」と彼女は微笑む。

老婆がサーカスに訪れるかという問いには、「さあ。きっとどこかで見てはいるんでしょうけれど、老婆の姿をしているとは限らないわ。

## 魔法の薬を差し出すか？

KP の裁量というか、ホイホイ出しているものではないけれど、めちゃくちゃゴネられた時はリスクもしっかり伝えたくて渡すこと。例えそれが禁断の果実であったとしても。

## 空中ブランコ乗りのエリー

男性の姿をしているかもしれないし、子供の姿かも。老婆のことはもう諦めなさい。あれはただの役者でしかないのだから」と答える。

エリーが怪物になった場合の対処法を聞くな  
ら、「それはないわ。あれは火も、酸も、放射線も、電気すら効かない。鋭い刃は最小限のダメージしか与えない。文字通り、怪物よ。できれば、貴方に立ち向かってほしくはないわ」と探索者に戦うことをすすめない。そうならないようにするのが賢明だ、と助言する。

彼女は最後に「醜いアヒルの子は、白鳥の子だった。なんて、そんな童話があったけれど。あの子は何の子なのかしら。そして、何になりたいと願っていたかしら」と呟くと、瞬きの間に消えている。SANC はなし。

### ▼瓶の中身を調べる

調べても正体不明。光を当てずとも、魔法のように煌めく湖を閉じ込めたような液体だ。探索者が飲むと、ピリリと辛い。炭酸のようにも感じる。飲むと心が和らぐような気がする。

### ◆図書館

探索者の住む町にある、馴染みのある図書館。おそらく 17 時で閉館するだろう。1 日目の探索でここに来ることは難しいので、2 日目に行くよう KP は誘導するべきだ。

「黒い血の怪物」について<図書館>で調べると、4 時間かけて以下の童話を見つけることができる。また、「見世物小屋のネルソン」で調べれば 1 時間で見つけ、読むことができる。

#### [見世物小屋のネルソン]

素晴らしい柔軟性を持った体のネルソンは、ゴム人間として見世物小屋で人気者だった。彼は素晴らしいカリスマ性を持っていた。

彼は普通とは違った。

彼にはできないことが多かった みんなの  
ことができることが彼にはできない。

しかし みんなのできないことが彼にはできた  
彼は誰よりも幸福だった。

彼は誰にでも好かれ、人気者だった。

しかしある日、彼は夢の中で奇妙でおそろしい  
怪物を見た。

洞窟の中にいるそれに、黒い液体を飲まされた  
それはネルソンの血の色と同じ色だった。

飛び起きたネルソンの体には黒い斑点が浮かび  
上がり、みるみるうちに体が言うことを聞か  
なくなっていく。

ネルソンがネルソンではなくなっていく。

怪物になったネルソンは周囲の人々を殺し、夢  
で見た怪物のいる洞窟を探して闇の中へ消えて  
いった。

可哀想なネルソン、さようなら、ネルソン。

エリーに起こった出来事と症状が一致してお  
り、彼女が怪物になってしまうのではないかと  
探索者は想像してしまう。SANC(1/1D3)

本の注には、1920 年代に起こった「ゴム人間事  
件」を元にした物語であると書かれている。

「ゴム人間事件」でさらに<図書館>で 4 時間か  
けて調べることができる。以下のことがわかる。

1920 年代ドイツにて、見世物小屋でゴム人間  
として活躍していた男が、突然観客に襲いかか  
る事件があった。男の体から流れた血は真っ黒  
で、ネバネバとした物だった。彼の全身には黒  
い斑点模様が浮かび上がっており、身体の一部  
がゼラチン状の物質になっていた。爪は恐ろし  
いほど伸び、かぎ爪に変化した。歯は鋭く、牙

小さな怪我（ダメージ 1P 程度）が沢山ある。ステータス的にニョグタの落とし子が落下して死ぬ為には HP が 1 の状態である必要があるの  
でこのような描写を加えた。これは手当されると困るので、KP はもし手当をしたいと言われたら<応急手当>をする時間はないと告げよう。

が生えていた。

白黒で彼の爪の写真が載っており、本物かどうかは判別が難しいが、人間のものとは思えない。 <写真術>成功で、合成ではないということが分かる。 <生物学>成功で、この爪がどの生物のものとも一致しないことが分かる。

SANC(1/1D3)

## 10. 探索を終えて

探索者は、掴んだ情報や選択の余地を手に、どのような面持ちだろうか。 探索者は、彼女の為に何をすべきだろう。 探索者達は、公演前のエリーに会うことができる。

探索者は今まで調べた出来事を全て報告した上で、エリーがどのようにすべきか、どのようにしたいか話し合うべきである。

KP はまず、探索者にエリーに調べたことの全てを知らせるか、それとも一部を知らせるか、嘘をつくのか、あるいはエリー以外の誰かに知らせるか尋ねること。 また、石須真里亜から菓を貰っていた場合、それを試すのか。

エリーは探索者から真実を聞くのを待ち望んでいる。 己が何者なのか、何者として本番に挑むべきなのか。 答えを求めている。

エリーのキャンピングカーの前まで探索者がやってくると、パトロンのイジャスラフが「お姫様が首を長くしてお待ちだよ。 どうか、よろしく頼むよ。 もし団長に話せないということなら、僕がここで見張っているから。 それくらいはさせてほしい」と見張りを買って出る。

探索者が団長にも話しておきたいと言うのであれば、彼は少し怪訝そうな顔をするが「それが必要だと思ったのなら、分かった。 呼んでくる」と団長を呼んできてくれる。

エリーは既に本番用の衣装に身を包んでいる。 白鳥のような、純白の衣装。 ところどころについた羽が、彼女が振り向くとふわりと舞った。 彼女は探索者がやってくると、不安と期待の混じった目を探索者に向ける。 その首にまで、黒い斑点が浮かび上がっていることを、探索者達は気づかざるを得ないだろう。 指摘されると、彼女は「これはあとでメイクで隠すから」と困ったように言って、探索者達に話を促す。 その他にもよく見れば怪我の痕があった。 指にはたこができていし、できたばかりだろう痣や、傷もある。 練習は過酷な物なのだろう、それでも彼女が諦めずに飛ぶ理由とは何なのだろうか。

### ▼エリーにのみ、真実を話す

彼女は自分が怪物の子供なのだと悟る。 彼女にどのように話すかによるが、最終的に以下のように決断するだろう。

「いずれ本物の怪物になって大切な人達を殺してしまうなら、私が私でなくなってしまうのなら、空中ブランコ乗りでいられなくなるのなら、せめて最期まで空中ブランコ乗りのエリーとして喝采の中で終わりたい。 だから、四回宙返りに命綱なしで挑戦するわ。 もしも四回宙返りができてしまったら、私は怪物なんだと思う。 その時はすぐに殺してほしいな。 四回宙返りに挑戦した最初で最後の空中ブランコ乗り、なんて、かっこよくないかしら？ そう思ったら、飛ぶことが怖くなくなってきた」

彼女の要望通りにさせるなら、探索者に感謝を述べると共に「もっと早くあなたに会えたら良かった。 せっかく知り合うことができたのに。 けど、見てほしいな。 私のラストステージ」と覚悟を決めた顔で言う。

命綱をつけるように言う、彼女の願いを否定



した場合「そう……。あなたがそう言うのなら、命綱をつけて飛ぼうかしら……。けど、飛び終わって舞台袖に行った時、私は私でいられるのかしら？」と呟いて探索者に感謝の言葉を述べる。

「私のこと、心配してくれてありがとう」

彼女に石須からもらった薬を飲ませるのなら、彼女は「それは……そんな都合のいい物なんてないって、あなたも思うでしょう？ おばあさんから貰った薬だって、飲んででも四回宙返りは結局できなかった。もうちょっとで、できそうではあるけれど……。いつか私が、私でなくなる未来が変わらないのなら意味がないわ。私は、空中ブランコ乗りとして終わりたいのだから」と拒否する。しかし、探索者が愛の告白紛いのことや交渉技能を用いるのであれば、彼女はそれに従うだろう。探索者の想いが、彼女に届く。「分かったわ、私、それを飲むわ。飲んで、私が私でなくなるまでの間、あなたのこともっと知りたい。空中ブランコ乗りじゃなく、何者かも分からないようなこんな私を、ただの女の子としてのエリーを愛してくれて、ありがとう」と告げるだろう。

薬を飲むと、みるみるうちに黒い斑点が引いていく。彼女の体の変化は、消え失せる。エリーは命綱をつけて四回宙返りに挑戦することを決める。ここで命綱をつけさせないという選択もできる。その場合はエンドAへ。

#### ▼エリーに真実を話さない

エリーに「怪物になってしまう」ということを言わずにそれ以外を伝える、あるいは嘘をついた場合、エリーは探索者の言葉を信じる。

「良かった。私は私なんだね。けど、この黒い斑点は治るのなら治したいし、団長にお願いしてかかりつけのお医者さんに診てもらおうと思

うの。最近なかなか会ってないから、会うのが楽しみだわ。それに、この公演が終わったでも、少しだけこの国に滞在できるの！ だから、またあなたにこの国を案内してもらいたいの。お願いできるかしら？」と嬉しそうに言う。

黒い液体の危険性を言っていない場合、「お婆さんに貰った薬も、何も問題がないのなら、願掛けとして薬を飲んでみようかな」と言う。液体を飲むことを許さない、薬を別の物にすり替えるなどするのであれば、Bエンドへ。液体を飲むことを許すのであればCエンドへ。

#### ▼エリーと団長に、真実を話す

エリーは▼エリーにのみ、真実を話すと同じことを言うが、団長がわなわなと震え出し、怒り狂って探索者とエリーを怒鳴りつける。

「何をデタラメ言っているんだ！ エリーも、何馬鹿なことを言っているんだ！ 命綱をつけないで一度も成功したことのない四回宙返りをやるだと？！ どういうつもりだ、エリー！ 私の天使！ 君は私を置いて天へ飛び立とうとでも言うのか？ 君は！ 君は怪物になんてならない！ なるわけがない！ 何も心配するな！ 君は私の言うことより、こんな奴らの言うことを信用するのか？！ やめてくれ、エリー。私の前からいなくならないでくれ。そんなことを言うならもう飛ぶな。私だけのエリー……」

団長はエリーに縋り付いて泣き出す。エリーは暫し探索者と団長を交互に見た後、「分かったわ、団長。私、命綱をつけて飛ぶから。お願い、許して。四回宙返りに挑戦はさせてください」と言う。

エリーは探索者に「団長と二人で話がしたいの。出て行ってもらえる？」と言う。団長も、探索者を追い出そうとする。

外に出ると、パトロンが肩をすくめてこう言

うだろう。

「ほらね。あの男には何も通用しない。恋でもなんでもいいけれど、ここまできるとただの我儘だよ。同じ男として嘆かわしいよ」と溜息を吐いて去っていく。

その後彼女の車付近で見張るなどする場合、相応の技能に成功する必要があるだろう。そして、彼女と団長が本番前になっても車から出てこないことに気付くことができるだろう。車には鍵がかかっている。何らかの形でエリーを車から出してあげ、団長を引き留める、または戦闘して足止めするならば、D エンド以外の道を得られるだろう。

何もしないで本番を待つのであれば、D エンドへ。

### ▼団長にのみ真実を話す

団長は聞く耳を持たないだろう。探索者を無視して、何処かへ行ってしまふ。

彼はエリーの車へと向かい、鍵をかけてエリーを閉じ込める。団長も中にいる。

何らかの形でエリーを車から出してあげ、団長を引き留めるまたは戦闘して足止めするならば、D エンド以外の道を得られるだろう。

何もしないで本番を待つのであれば、D エンドへ。

### ▼団員たちに真実を話す

団員たちは真実を知ると、皆青ざめる。マーシーは「何バカなこと言ってるの?! エリーを怪物扱いするとか、アンタ何考えてんのよ! まさかそれ本人に言ってないでしょうね?! あの子が傷つくでしょうが! 」と顔を赤くして怒る。ジャンは「それが本当なら、私はこのサーカスを去ろう。星屑サーカスにでも行こうか。甘噛みするライオンとは、訳が違うだろう」と

呟く。ペトルは青ざめるが、「それが本当だとしても、俺たちじゃなくてエリー本人に伝えろよな。俺たちじゃどうしたらいいか分かんねえよ」と冷たく言う。キルスティンは「エリー先輩が怪物の子? 」と驚き震え、「あたし、無理っす。エリー先輩のことは好きだけど、今日は、空中ブランコできないっす」と言って聞かなくなる。彼女はエリーにブランコを投げることしかしなくなってしまう。自分が手を掴んだ瞬間に怪物になられたらと想像し、恐ろしくなっているのだ。

彼らにエリーが命綱なしで挑戦することを告げると、それを良しとする。それぞれの思惑はあるだろうが、皆「エリーを応援するしかない」と言うだろう。

### ▼パトロンに真実を話す

パトロンは最初は信じられないといった様子だが、すべてを聞くと納得してくれる。そして、「それは、私じゃなくて彼女に言ってくれ。なんとなく予想はしていたが、そうじゃないことを祈っていたよ」と言う。彼の手が震えていることに、探索者は気づくだろう。

### ▼エリーに真実を話さない&エリーを連れ出そうとする

エリーは非常に困惑するし、連れ出そうとしても素直についていくことはない。そもそも自分のことを調べてもらう為に探索者にお願いをしていたわけだし、本番をほったらかして探索者の願いを聞くことは普通ありえない。もしそういった無理を働こうとするならば、交渉技能にクリティカルでもしなければKPは許可をするべきではないだろう。そもそも、その先に待ち受ける結末は、エリーの破滅と最悪探索者の破滅である。イシスからの薬を飲んでいないのであれば、エリーは探索者の前で怪物の姿にな

るだろうし、薬を飲ませることに成功すればエンドFへと向かうことになる。いずれにせよ、何の解決にもならないのだ。

## 11. エンディング

まず、探索者がエリーに真実を伝え、命綱をつけさせないのであればエンドAの描写へ進む。命綱をつけさせエリーを逃がすのであれば、エンドBへ。

黒い液体を飲み干させるのであればエンドCへ。

団長によって捉えられたエリーを救出するが逃がしてしまうのであれば、エンドDへ。

探索者が怪物となったエリーに殺された場合、エンドEへ。

エリーに薬を飲ませた場合、エンドFへ。

### ■A エンド「空中ブランコ乗りのエリー」

探索者はパトロンによって手配された最前席に案内される。探索者が話をしたであろう綱渡りのマーシー、ピエロのペトル、猛獣使いのジャン、手品師兼空中ブランコ乗りのキルスティンなどの鮮やかで艶やかな演目に、探索者は目を奪われる。人間とは思えぬ技、見ていてヒヤヒヤするが、成功した際の拍手は大きなものだ。なるほど、これだけの喝采を浴びたら気持ちいいのだろう。彼らはこの為に生きているのだろうと、探索者は思う。いよいよ最後の、エリーの出番となる。

「エリーは命綱なしで人間には不可能といわれる四回宙返りを行います。この勇気を称えましょう！ 失敗しても拍手をお願いします」という司会の紹介の後、いつになく真剣な美しい少女を観客は息を呑んで見つめる。白鳥のような

衣装は、このサーカスを背に世界へ羽ばたく夢の象徴に見えた。

ドラムロールが鳴り響く中、エリーはブランコから手を離し、宙を舞う。

くるくると美しく、宙で一回。それは鳥のように。二回、まるで豹のように。三回、さながら鮎のように。四回……回った。彼女は成功に笑みを浮かべ、手を伸ばす。しかし、伸ばした手はあと少しでブランコを（キルスティンの手を）掴むことができずに、彼女は落ちていく。白い鳥は、笑顔のまま落ちていく。勢いがつきすぎたのだろうか、安全用のマットからずれて落ちようとしていた。探索者には、その様子がスローモーションで見えるだろう。

落ちる瞬間、探索者と彼女の目が合う。彼女は笑顔だ。

「拍手して」

彼女はそう言ったのかもしれない。

地に落ちた彼女のしなやかな腕は曲がってはいけな方向へ曲がって、足は折れて中から黒い液体が溢れた。もう、息はない。

照明に照らされた彼女は笑顔だった。シンとしていた会場からすすり泣く声がいくつも聞こえたが、彼女の勇気に誰もが拍手をした。するしかなかった。光と喝采を浴びて、エリーは空中ブランコ乗りのエリーとして死んだ。これが、彼女の望んだ結末。探索者の促した終幕。空中ブランコ乗りのエリーは、笑顔で死んだ。

SANC (1/1D4+1)

探索者がこの結末をどう受け取るのかは分からない。

しかし、後の世までこう語られるはずだ。

「空中ブランコ乗りと言われれば、それはエリーである」と。

彼女は、死んでも空中ブランコ乗りとしてこ

れからも人々の記憶の中で生き続けるのである。  
このことは、きっと、誰にも真似などできない。  
彼女だけの人生。

## ■B エンド 「消えたエリー」

探索者はパトロンによって手配された最前席に案内される。探索者が話をしたであろう綱渡りのマーシー、ピエロのペトル、猛獣使いのジャン、手品師兼空中ブランコ乗りのキルスティンなどの鮮やかで艶やかな演目に、探索者は目を奪われる。人間とは思えぬ技、見ていてヒヤヒヤするが、成功した際の拍手は大きなものだ。なるほど、これだけの喝采を浴びたら気持ちいいのだろう。彼らはこの為<sup>もの</sup>に生きているのだらうと、探索者は思う。いよいよ最後の、エリーの出番となる。

「エリーは命綱なしで人間には不可能といわれる四回宙返りを行います。この勇気を称えましょう！ 失敗しても拍手をお願いします」という司会の紹介の後、いつになく真剣な美しい少女を観客は息を呑んで見つめる。白鳥のような衣装は、このサーカスを背に世界へ羽ばたく夢の象徴に見えた。しかし彼女の表情はどこか不安げで、迷いがあるように感じられる。翼を広げられない雛鳥のようだ。

ドラムロールが鳴り響く中、エリーはブランコから手を離し、宙を舞う。

くるくると美しく、宙で一回。それは鳥のように。二回、まるで豹のように。三回、さながら鮎のように。四回……回った。彼女は成功に笑みを浮かべ、手を伸ばす。しかし伸ばした手はあと少しでブランコを掴むことができずに、彼女は命綱によって宙ぶらりんになった。

会場からは「あー、残念だったねー」「惜しい、あとちょっと！」というガッカリした声と共に、静かな拍手がおこる。エリーは顔を真っ

赤にさせて、目に涙をいっぱい溜めながら、唇を噛みしめて逃げるように舞台袖に消える。その時、エリーの白くて細い首が、黒く染まってい<sup>く</sup>のを探索者は見ることになるだろう。

探索者は舞台裏に様子を見に行くことができる。（行かない、と言われた場合は団員達がエリーを探しているなどといった感じで、探索者を舞台袖に誘導すること）

エリーは命綱を外した途端どこかへ行ってしまったらしく、姿が見えない。

探索者はテント端のカーテンに誰かが隠れていることに気付く。

カーテンを開くとそこには、死体のようにぶよぶよに膨れて、黒い蛆虫の群れの塊のような体を持つ、恐ろしく歪んだ顔の怪物がいた。かぎ爪に、鋭い牙は本で見たものと同じだった。

### SANC (1/1D10)

そして、かろうじて人の形をしているそれが身に纏っている衣装は、エリーの物である。探索者は気付く。エリーは、エリーでなくなってしまったということに。

### SANC(1/1D4+1)

赤い目の怪物は、探索者から逃げ闇の中へと消えていく。追いかけるなら、DEX×14との対抗ロールで探索者が成功する必要がある。追いついたの後、戦闘処理へ。▼怪物と戦闘する参照)

翌日新聞に載るのは、「四回宙返り失敗に絶望?! 消えたエリー」という見出しの記事である。

エリーは、どこにもいない。どこを探しても、いないのだ。それは、探索者だけが知っている。

黒く染まった白鳥は、闇の中へと消えたのだ。

## ■C エンド 「醜い怪物の子」

エリーは、本番直前に黒い液体を飲み乾す。

探索者はパトロンによって手配された最前席に案内される。探索者が話をしたであろう綱渡りのマーシー、ピエロのペトル、猛獣使いのジャン、手品師兼空中ブランコ乗りのキルスティンなどの鮮やかで艶やかな演目に、探索者は目を奪われる。人間とは思えぬ技、見ていてヒヤヒヤするが、成功した際の拍手は大きなものだ。なるほど、これだけの喝采を浴びたら気持ちいいのだろう。彼らはこの為に生きているのだろうと、探索者は思う。いよいよ最後の、エリーの出番となる。

「エリーは命綱なしで人間には不可能といわれる四回宙返りを行います。この勇気を称えましょう！失敗しても拍手をお願いします」という司会の紹介の後、いつになく真剣な美しい少女を観客は息を呑んで見つめる。白鳥のような衣装は、このサーカスを背に世界へ羽ばたく夢の象徴に見えた。自信を取り戻した彼女は、絶対に成功させると意気込んでいるようだ。

ドラムロールが鳴り響く中、エリーはブランコから手を離し、宙を舞う。

くるくると美しく、宙で一回。それは鳥のように。二回、まるで豹のように。三回、さながら鮎のように。四回……回った。彼女は成功に笑みを浮かべ、手を伸ばし、掴んだ。見事、彼女は四回宙返りを成功させたのだ！

観客のどよめきがテント中を揺るがして、誰もが思わず涙を流しながら、辺りにいる人々と興奮をわかち合った。探索者も、彼女が舞うその瞬間に心動かされ、気付かぬ間に涙しているだろう。

だがその時、探索者だけが気付く。

飛んでいたのは本当にエリーだったのか？と。舞台袖に消えるように飛びこんでいったエリーだったそれは、黒く、大きい、何かだったので

はないか？そして、キルスティンが彼女の腕を掴んでいたならば、割れるような拍手の中、彼女の助けを求める悲鳴が聞こえたことに。

探索者は舞台裏にエリーの無事を確認しに行くだらう。（行かないのなら、最前列だったからと理由つけて無理矢理にでも舞台袖から以下の状況が見えたことにする）

誰もいなくなった明るいステージとは裏腹に、拍手に掻き消される悲鳴が暗い舞台裏には木霊していた。

黒い怪物が舞台裏に飛び込んで、団員達は襲われたようだ。

綱渡りの娘マーシーが、猛獣使いジャンが、ピエロのペトルが、団長のパートランドが、そしてキルスティンが、真っ赤な血を流して死んでいる。SANC(1D3/1D6+1)

エリーは何処にもいない。

そこにいたのは、死体のようにぶよぶよに膨れて、黒い蛆虫の群れの塊のような体を持つ、恐ろしく歪んだ顔の怪物だった。かぎ爪に、鋭い牙は本で見たものと同じだった。SANC(1/1D10)

かろうじて人の形をしているそれが身に纏っている衣装は、エリーの物である。探索者は気付く。エリーは、エリーでなくなってしまったということに。SANC(1/1D4+1)

怪物は探索者から逃げ、闇の中へと消えていく。怪物を追いかける場合はDEX 対抗の後、戦闘処理。▼怪物と戦闘する参照。

翌日新聞に載るのは、「サーカスで起こった殺人事件！？逃亡した殺人犯はエリー？」という見出しの記事と、「世界一のサーカス、星屑サーカス団遂に日本初公演！」という広告である。



誰かが闇に消えゆく中、光と喝采を浴びる星屑の煌めき。黒く染まった白鳥は、暗い湖へと帰ったのだろうか。

## ■D エンド 「恋という鳥籠」

団長はエリーを閉じ込めるが、エリーは団長の前で怪物に変身してしまう。団長は怪物となったエリーに殺され、怪物は車の外に出て逃げていく。

キャンピングカーの中には、切り裂かれ、黒い液体に溺れる肉塊がある。その周囲に団長の服の切れ端と、シルクハットが落ちている。この肉塊が団長バートランドの死体であるとわかる。目撃したなら SANC (1/1D4+1)

そこにいたのは、死体のようにぶよぶよに膨れて体は黒い蛆虫の群れの塊のようで、恐ろしく歪んだ顔の怪物である。SANC (1/1D10)

かろうじて人の形をしているそれが身に纏っている衣装は、エリーの物である。探索者は気付く。エリーは、エリーでなくなってしまったということに。SANC(1/1D4+1)

怪物は探索者から逃げ、闇の中へと消えていく。怪物を追いかける場合は DEX 対抗の怪物を目撃したなら SANC (0/1D10)

そしてそれがエリーの着ていた服の布を纏っていることから、エリーであると気付く。SANC (1/1D4+1)

怪物を追いかける場合は DEX 対抗の後、戦闘処理。▼怪物と戦闘する参照。

エリーは本番には出られなかった。

翌日ゴシップ誌には「エリーは団長に犯されかけ、彼を殺して逃げたのでは？」と書かれており、新聞には「本番すっぱかし!? エリーファン落胆」という見出しがある。真相は闇の中、

消えたエリーが持って行ってしまった。

鳥籠を抜け出した鳥は、親の元へと帰っていたのだろうか。醜い怪物の元へと。

## ▼怪物と戦闘する

怪物のターンになった時、まず KP はシークレットダイスでエリーが探索者を認識して攻撃を止め、逃走するかどうか彼女の POW×3 (54%) で判定する。成功したら逃走を再び試みる。失敗なら攻撃をする。

彼女に対して<説得>などの交渉技能や<精神分析>で向き合うというのなら、成功すればその想いを彼女は理解し自我を保てるだろう。しかし、それは探索者からの逃走を試みるということになる。また、怪物となった彼女に石須からもらった薬を飲ませることはできない。飲ませても、戻ることは絶対はない。

## 怪物となったエリー

STR 29 CON 20 SIZ 20 INT 15 POW 18  
DEX 14 耐久力 20 db +2D6

### [攻撃]

かぎ爪 65% ダメージ 1D6+db

噛みつき 65% ダメージ 1D8+db

組み付き 50% 以下参照

STR 対抗の後、無数の巻きひげが犠牲者の開口部へ押し入り SANC(0/1D6)

逃れられない限り毎ラウンド CON 対抗と、1D8 のダメージを受ける。

窒息死するまでこの組み付きは続くが、彼女の精神が怪物の精神に勝てば解放される可能性がある。

### [装甲]

貫通可能な武器のダメージ無効、ほか全ての攻

撃ダメージの最小値しか受けない  
火・酸・電気・放射線によるダメージ無効

-----

探索者は見事、怪物を倒した。死ぬ間際、ゼラチン状の怪物はドロドロと溶けながら、かつての少女が持っていた美しい青の瞳を探索者に向けて以下のように言うだろう。

#### ▼Bを經由しての場合

「綱が私の命を結び止めたのに……結局こうなっちゃって。何だろう、すごく悔しいな……成功させたかったな。ねえ、私は一体、何になれたのかしら」

そう問いかけると、彼女はバシャンと音を立てて黒い液体となる。人、一人分の醜い水たまりが、そこに残った。

以上の描写の後に、B エンドの描写へ。

#### ▼Cを經由しての場合

「飛べた時……嬉しかったのにな……何でだろう……今、すごく悲しいわ……」

そう言って「エリー」は完全に死んだ。バシャンと音を立てて黒い液体となる。人、一人分の醜い水たまりだけが、そこに残った。

以上の描写の後に、C エンドの描写へ。

#### ▼Dを經由しての場合

「私、団長があんなに私を好きだなんて、知らなかったの。私も団長のことは好きだったわ。けど、あんなのは望んでいなかった。私が悪かったのかな。自分自身をも失い、大切な人の命さえ奪う人生なら。私、生まれてこなければ良かった……」

本当に悲しそうに、現実から目を背ける言葉を残し、彼女はバシャンと音を立てて黒い液体

となった。一人分の水たまりが、そこに残った。  
以上の描写の後に、D エンドの描写へ。

#### ■E エンド 「拍手のない終幕」

怪物に殺された探索者の意識は、暗闇の中で覚醒する。その暗闇は闇ではなく、黒いゼラチン状の怪物に支配された空間であることに探索者は気付くだろう。

そこに、エリーはいた。姿形が変わったそれは、その闇の中で飛んでいた。怪物になっても、彼女は飛んでいる。不快な黒の世界で、鳥のように飛び、豹のように俊敏に、鮎のように跳ねていた。一回、二回、三回、四回、回って飛んで、見事なものだ。しかし、拍手をおくる者は一人もいない。彼女にスポットライトは当たらない。

それは死に逝く探索者が最期に見た幻影だったのかは分からない。ひとりぼっちの哀しいサーカスは、いつまで続くのだろうか。

このサーカスは、誰の為に披露されているのだろう。人生という悲劇は、誰の為にあるのだろう。終幕。

#### ■F エンド 「アンコールを求める拍手を」

このエンドは、探索者がエリーに石須からもらった薬を飲ませ、命綱をつけさせて本番に臨ませた場合にのみ至る結末である。本番の描写はB エンドほぼそのままだが、彼女は失敗してもさほど恥じることはない。彼女の興味は、自分自身より探索者に向いているのだ。エリーは、探索者に恋心のようなものを抱き始めている。

探索者にエリーは、再びデートの約束を取り付けることだろう。その際、彼女は大荷物で探索者のもとへやってくる。

「私、白鳥サーカス団も、空中ブランコ乗りも辞めました。急にごめんなさい。でも、あなたもずっと一緒にいたいって思っちゃったから、いてもたってもいられなくて。これが、好きってことなのかな。これからは私、空中ブランコ乗りのエリーじゃないの、ただのエリーよ。よろしくね」

エリーは探索者のもとに居候するか、探索者の近くで暮らすことになる。黒い血を持つ怪物の娘は、探索者の隣で幸せそうに笑った。人生の幕引きは、やはりハッピーエンドでなければならない。めでたし、めでたし。

これで人生が終わりならば、きっと、めでたかっただろう。探索者とエリーの人生は、残念

ながらこれからも続いていく。ピリオドが打たれるまでは。

「あなたも必ずいつかは出会うことになるのを忘れないで。エリーじゃない、あなた達の命を狙う、怪物と」

#### ■？エンド

まだ人間の姿であるエリーを殺した場合、探索者は逮捕される。エリーは殺される前に「せめて最期に四回宙返りに挑戦したい」と願うだろう。また、彼女が周囲に助けを求めるのであれば、サーカスの団員たちとも戦うことになる。

## 12.エピローグ

宵闇に一つ、拍手が響く。

星屑の中にぽっかり浮かぶ月を背にするは、黒いローブを纏った老婆。月をその顔に浴びて神秘的な雰囲気醸し出すのは、女性占い師。どちらが拍手をしたのだろう。既に二人とも、手を下ろしているので判別がつかなくなってしまった。

「あなた、まだそんなことをしているのね。悪趣味だわ」

「君こそ、禁断の林檎を差し出す蛇のような真似をしてどんな気分だい？」

一つの影、老婆が混沌へと消えていく。残された占い師は、祈るように一枚の羽根を手にとると、息を吹きかけた。

「どうか彼女が、幸せでありますように」

白い羽根は天高く、風に乗ってどこまでも。夢を運ぶかつての彼女のように、世界へ飛び立った。

彼女はだあれ？  
彼女はエリー  
空中ブランコ乗りのエリー

■クリア報酬

エリーに真実を伝えた 1D6

エリーの最期を見届けた 1D3+1

エリーの身を案じて命綱をつけるよう言った 1

エリーに四回宙返りをさせてあげた 1

エリーに薬を飲ませ、彼女の生きる道しるべとなった 1D3+1

クトゥルフ神話技能 1

